

## 1905年12月モスクワ武装蜂起

高田, 和夫  
九州大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/1887>

---

出版情報 : 法政研究. 55 (1), pp.113-205, 1988-10-07. 九州大学法政学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 一九〇五年一二月モスクワ武装蜂起

高田和夫

## 目次

- 一 序
- 二 鉄道労働者の動向
- 三 兵士の動向
- 四 ソヴェトと蜂起の決定過程
- 五 蜂起の過程
- 六 プレスニヤにおける闘争
- 七 蜂起の帰結

## 一 序

一九〇五年一二月のモスクワ武装蜂起については、通例、ロシア第一次革命期の最後に企てられた本格的人民運動としての位置が与えられている。だとすれば、同年一月九日のいわゆる血の日曜日事件以降に展開された一連の革命過程にあって、十月ゼネスト及び十月一七日詔書発布までをこの革命が登りつめたピークとすれば、その後の折り返

し期にあつて、革命運動はその力量を維持して、今一度の高揚をモスクワ武装蜂起で記録したことになる。

ここでは、まず、この蜂起に直接関わるものに限定して、従来の資料刊行と研究の状況を簡単にサーヴェイし、あわせて本論の視角に触れておきたい。

蜂起の翌年、一九〇六年に早々と関係資料集が三冊出た（**2**、**3**、**4**。ゴチック数字は本論末尾の参考文献一覧のそれに対応している。以下同様。なお、モスクワ蜂起関係ビブリオで最も詳しいのは**1**）。このうち、**2**はメンシェヴィキ系の編集（**П・B・コフマンスキーの発行**）になるもので、筆者は現在までの資料集の中で構成、内容等で最もすぐれたものと判断し、本論作成にあたり多くをこれに依拠した。**3**は蜂起関係者に対する起訴状を集めたものである。**4**及び一九〇九年（第二版）の**8**は観察記の類で、特に**8**の執筆者は右翼である。一九〇九年にトロツキーは独語版『革命の中のロシア』を出したが、これは一九二二年、ソヴェトからロシア語版『一九〇五年』として再刊された。その和訳書は**49**。筆者が見たのは一九二四年刊第四版**9**である。当該期ペテルブルク・ソヴェトの中央にあつた彼の議論は当然、参照されねばならないが、残念なことに彼は蜂起直前の一二月三日に逮捕されている。

ソヴェト期になり、資料集と回想録の刊行はさらに前進をみたが、最も初期のものとしては**11**と**12**が注目される。

**B・ストロージェフ編集の12**はアルヒーフ資料を使って手堅いものであるが、これは**11**に所収した日誌的記録部分を分離刊行したものである。

五年革命二〇周年の一九二五年は関連書の出版が相次いだ。が、**14**はモスクワ・ソヴェト『イズヴェスチヤ』を収録して便利であり、そのソヴェトについておそらく唯一の単行本であるヴァシーリエフユージンのも**15**も出た。更にモスクワ市の地区別革命運動に関するものとして**18**や**19**も刊行された。この場合、全市街が等しく蜂起したのではないから、地区別の様相を示す資料は貴重である。また、ゴーリンのソヴェト論**16**もこの年に出た。

一九二五年に続いては、一九三〇年に出た**32**が目立つ。これはプレスニャの最大拠点となったプロホロフ綿工場労働者の豊かな回想を集めて、注目される。この本については本論でも少しく触れるが、極めて率直な物語りは印象的ですからある。一九三二（三一）年に出たB・И・ネフスキーのソヴェト論**34**を除くと、その後、三〇年代は関連文献の刊行は停滞する。

しかし、一九四〇年に資料集**35**が出た。刊行時期が時期だけにその内容は無残なものかと思いきや、特に軍隊関係に新資料の提示が見られて十分に利用に耐えるもので、予断をもって資料に接することの危険性と愚かしさを示す一冊である。四〇年代の刊行で白眉は四六年にニューヨークで出た、メンシェヴィキの当該期プレスニャ地区活動家であったП・А・ガルヴィの回想**38**である。とかくポリシエヴィキ側の整理に立つ資料刊行が主流となる中で、情報の重ね合わせにとり、これは極めて貴重である。

この後に来るのが、五年革命五〇周年記念の多巻本資料集のうち、一九五五年の**39**であるが、これは右に言う整理の見本で、これだけでは蜂起の全体像にいくらかでも接近することさえ困難である。ただし、ここに収録された『プラーヴォ（法）』誌の記事は参考になる。これ以降、本格的な資料集と回想集の刊行はなされていない。

一方、研究的には近年のソヴェト史学界で最初にまとまった形でモスクワ武装蜂起を論じたのは、おそらく一九四六年に出たC・チェルノモルディクの二点**36**、**37**であろう。彼はパンクラートヴァと共同執筆**40**で、『モスクワ史』第五卷（一九五五年）で蜂起を論じたが、現在に至るまで、かの国で五年革命期の蜂起論の代表的なものとしてあるのが、一九五七年に出たH・H・ヤコブレフのもの**42**である。この大著はモスクワに限定せず、広く各地の蜂起を扱っているが、各所に論証を欠くか、論理展開に無理がある独断が散りばめられている。そのモスクワ蜂起論は記述が市中心部に偏し、周縁部と特に鉄道労働者の動向分析が弱い。これらに対し、近年の西側の研究で注目されるのは、

エンゲルスタインの五年革命時のモスクワを扱ったもの**46**である。これはヤコヴレフ的独断から自由であり、参考になる。

筆者がこれらの資料、回想、研究書を読む中で気付いた点は、蜂起の参加主体がその運動において、蜂起指導部と必ずしも調和していなかったことであり、主体それぞれが独自の判断を伴う動きを見せていたことである。この場合、主体とは具体的には鉄道労働者であり、兵士であり、工場労働者である。人民運動として蜂起の全体像を把握することは、その指導部の動向や意向を整理して終ることでは無論ないのであって、ここでは、右の諸動向への目配りが不可欠と思える。なお、この辺の問題については**五節冒頭**でもう少し言及したい。

このように蜂起参加者をとりあえずの構成要素別に分けてみると、そのうち工場労働者についてはソヴェト、プレスニャ闘争等の場面でよく触れることになるので、本論では特に鉄道労働者と兵士につき独自に節を設けることにしたい。ここでは、両者についても一定の研究蓄積があることに目を向けておきたい。

当該期の鉄道労働者について、最も早く一九〇六―七年に**5**と**7**が出ている。**5**は少しく全般的に過ぎ、**B・ロマノフの7**は残念なことに射程が一二月に及んでいないが、前史を理解するのに役立つ。

ソヴェト期になって、やはり一九二五年頃に**20**、**21**、**22**、**25**、**26**、**27**、**28**、**29**、**30**と集中的に刊行がなされたが、これらのうちで注目されるのは、全露鉄道同盟の出版になる**21**、**22**、同盟議長**B・H・ペレヴェルゼフの26**、そして**B・クルグリャーコフの27**、**28**、**29**であろう。クルグリャーコフはポリシェヴィキの側から同盟を批判する立場をとっている。近年におけるソヴェト史学界で最もまとまった鉄道労働者論は**I・M・プシカリョーヴァの45**であり、西側では一九八七年に**H・ライヒマン**が初めての本格的モノグラフ**48**を出した。ライヒマンはプシカリョーヴァの立論を基本的に前提とする立場をとっている。

一方、兵士については、その革命運動論ないし蜂起論と懲罰隊論の双方に若干の研究蓄積をみせている。一九〇六年にはB・ヴラジーミルがカザン線に於ける懲罰隊の動向に関して単行本6を出したが、今日に至るまで最も詳細な内容を誇っている。

ソヴェト期に、個別論文の形で、懲罰隊につき、10、24が出たが、革命運動関係の刊行がより目につく。中でも当該期のロストフ反乱について、一九二五―六年に23、31があり、その後、研究領域は拡大してより全般的に兵士運動をとらえ、33、41、43、44などが出た。これらのうち、モノグラフとしてB・A・ペトロフのものが若干古いが現代ソヴェト史学界の代表的著作であろう。このように兵士をめぐる議論は懲罰と反乱の二側面につき展開されてきたが、西側では一九八五年にJ・ブシネルがまさしく兵士のこの二面性をタイトルとした最初の本格的な研究書47を出した。

筆者としては、丁度、東西において本格的な研究書がとりあえず出そろったところで、それらを参考にしつつ、本論を執筆したが、武装蜂起の全体像を従来の叙述より総合的に描くことに努めたつもりである。ただし、資料的には右に触れた刊行物に専ら依拠していて、ここでは本来ならば検討すべき新聞類やアルヒーフは見えていない。右記の、特に西側で出た著作もこれらの検討が必ずしも十分でない印象を受けるが、我国における研究状況に照すと、筆者の知る限り、この蜂起については、基本的にレーニン全集を利用した渡辺正幸氏のもの50があるだけである。

## 二 鉄道労働者の動向

ロシアの第一次革命期に独自の軌跡を描いた全露鉄道同盟 (Всероссийский железнодорожный союз) (以下「同盟」) 結成のイニシアチヴをとったのはロシア技術協会モスクワ支部付属「労働博物館 Музей труда」のリベラルたちであったとよくいわれるのであるが、同協会に集った専門家たちが政府と一定の緊張関係にあったことはすでに筆者が触れている点であり、彼らが鉄道労働者の組織化を主導した事実自体は意外感に乏しい。「同盟」議長 B・H・ペレヴェルゼフは「労働博物館」での集会で、鉄道員の間組合を作る話が出て、自分がその組織案を作成したと回想し、C・アントネヴィチは「労働博物館」のリベラルたちが組織した集会で「モスクワ市鉄道職員相互援助協会」規定の制定をなしたと、より具体的直接的に「同盟」発生時の様子を述べている。更に、B・クルグリャーコフは、鉄道員の全露的結合の思想は同上協会付属の「労働助成博物館」(Музей содействия труду 右の博物館と同じ) で生まれた。つまり、そこで五年一月スト後の運動展望が図られた際、相互援助を目的とする鉄道間委員会の結成をすることになったという。

これら三者の発言は大筋で一致し、少なくとも四月以前の段階でモスクワに於て鉄道員の全国的団結の方向が出たと推定される。それ故、三月二九日の運輸相回状が鉄道員に対してあらゆる選出的組織化を禁止したと思える。

ペレヴェルゼフは右に引用した個所で、彼が作成した組織案は無党派的原则に立脚した単一組合を考え、その活動方針は諸自由と憲法制定会議の実現をめざす政治的要求を前面に出したもので、これは四月二〇―二一日の「同盟」第一回大会で承認されたという。このモスクワでの大会についてはさらに幾つかの記録がある。それらによれば、そ

ここに参加したのは主にモスクワ鉄道管理局内の一〇路線の鉄道職員スルージヤンエたちで、革命諸党派やロシア技術協会からも出席者があった。大会では、「同盟」が協同組合的組織をめざし、どの政党にも合流しない無党派的原理に立脚し、鉄道職員の物質的・法的・文化的・勤労的利益は民主的國家体制の下でのみ可能であるとみなし、立法権を有する人民代表者を召集することを確認した。さらに執行機関として七名から成る「中央ビュロー」が選出され、議長ペレヴェルゼフ、同補佐B・ロマノフの他、電信技手、会計係、法律家さらに労働者二名がそれに加わった。彼らの内訳は、ペレヴェルゼフらエスエル三名、ポリシェヴィキ二名、メンシェヴィキとアナキスト各一名であった。<sup>(6)</sup>

しかし、この大会に出席したモスクワブルスト線の代表が大会はいわゆる職員のみで、労働者代表が不在である点に不満を表明した<sup>(7)</sup>ことに示されたように、社会民主党系の階級的組織論と中央ビュロー主流の「階級的な」無党派的人民的組織論が激しく対立した。ペレヴェルゼフは「同盟」の活動にとり最大の障害となったのはモスクワの社会民主党グループであった<sup>(8)</sup>という。

そもそも「同盟」は、ロシア技術協会側のリードがあったとしても、労働側が全く無から出発した訳ではなく、ロマノフが指摘するように、一九〇五年初頭に各路線に様々な傾向をもって出現した鉄道員組織に立脚して初めて成立したものであり、<sup>(9)</sup>このこともあって、大会では、各路線に「同盟」支部として「地方委員会 местный комитет」をつくり、そこにストライキ決定権を付与するという「同盟」構成体の「組織的オートノミー」を重視する組織原理が採択された<sup>(10)</sup>から、中央ビュローが一元的に組織を束ねることはなく（出来ず）、一部路線では別途に社会民主党系が独自の活動をなすことも観察されたのであり、とりあえず中央の指導力が及んだのはモスクワ鉄道管理局内であった。<sup>(11)</sup>

そして、ペレヴェルゼフの「同盟」がまず行なったことはモスクワの全党派グループとコンタクトを持ちつつ、結

成されたばかりの「専門職業家連盟 [ОГОЗ СОТЗОР]」と関係を保つことであった。<sup>(12)</sup>

七月二二―二四日、モスクワで二二路線の代表を集めて「同盟」第二回大会が開催され、国家改革加速化のために政治ゼネスト準備を議論し、ストライキ決定権を中央ビュローに移行させたが、ポーランドからの代表がポーランド王国が独自の憲法制定会議を召集出来るまで、ロシア人鉄道員は闘争を止めないよう「同盟」綱領の修正を求め、大会は二分して紛糾した。結局、これは否定され、ポーランド及び社会民主党系の代表は「同盟」を脱退した。<sup>(13)</sup>

九月二〇日、運輸相は年金規約見直しのためにペテルブルクに鉄道職員大会を召集した。しかし、大会では政府側の予想を越えて、参加者たちにより第一回全露鉄道職員代議員大会が宣言され、憲法制定会議、政治的自由、八時間労働日、恩赦、自治等の要求が採択された。<sup>(14)</sup>

「同盟」中央ビュローは鉄道ゼネスト接近を実感し、その成功のためにモスクワの全党派グループに協力を要請し、エスエル、社会民主党両派、幾つかの労組を加えた情報委員会を結成した。しかし、ペレヴェルゼフによれば、「同盟」と一時的な「休戦」を結んだモスクワの社会民主党グループは労働者の気分低下を理由に地方的ストのみを引き受け、他を「同盟」にまかす方針をとった。「同盟」側はこれを認め、スト突入を十月四日に指定した。<sup>(15)</sup>しかし、グループ側は四日には何もなせず、「同盟」は改めて独自に七日のスト開始を定め、それを実行した。<sup>(16)</sup>十月七日、モスクワカザン線の機関士が先頭に立ち鉄道ゼネストが開始された。同日、「同盟」中央ビュローは、言論・出版・集会・結社・ストライキの自由、普通・平等・直接・秘密投票による人民代表機関の召集（さらに、九日に出した11項目要求で、憲法制定会議をいう）をその基本目標に設定し、更に経済要求実現をめざした。八日夜、ペレヴェルゼフら「同盟」指導部が逮捕されたが、これはストの進展自体に少なくとも外見上影響を与えない。ポリシェヴィキは当初、開始されたストが全国化することに対し懐疑的であったが、ほとんど全国の路線が十日に停止するに及び、全

国ゼネストを認知するところとなった。

一九〇五年一一二月の段階で目立ったポーランド、バルト諸県、カフカースでの鉄道員の戦闘性は、この十月には、モスクワを中心とする中央部ロシアでより力強いものとなった。だが、モスクワから拡大を見せたストの波は全国的に均等な伝播をした訳ではなく、鉄道員の参加度合い、リーダーシップのあり方、戦闘性等は地方各路線毎に様々であった。この間、「同盟」中央と地方各支部との戦術的結合はほとんどみられず、各路線は中央からいわば独立したストライキ委員会等を結成して、独自の動きをみせた。こうした「同盟」自体のあり方も理由になって、モスクワでは、次に触れる十月一七日詔書以前にストライキ運動は下降し出した。そして、詔書は労働戦線にひびを入れ、確実にそれを拡張した。十月一九日、「同盟」中央は「一時的に」ストを中止する指令を出した。<sup>(17)</sup>

ここで十月一七日詔書（マニフェスト）をめぐり、一般的な話を若干したい。

詔書は人民大衆にとり、まずは予期しえなかったものであり、そして歓迎されるべきものであった。このことについては、多数の証言がある。一九〇五年九月にモスクワ市北部プトウイルスキー地区のポリシェヴィキ責任組織者となったO・И・イヴァニツカヤは、詔書は我々にとり全く予期しえなかったものだ<sup>(18)</sup>と回想する。また、ロストフはこう書いている。——夕方、このこと「詔書」がペテルブルクに知れると、ネフスキー大通りの人民群集は「ウラー」と叫んでこの知らせを受けとめた……広範な人民大衆によりこの詔書は大きな喜びをもってむかえられた……両首都だけでなく、全ての地方で詔書が伝わるや、それは一様に喜びの感情を引き起<sup>(19)</sup>こした。

モスクワの人々は翌一八日の新聞でそれを知ったのだが、その日のうちにモスクワ・ストライキ委員会は一九日のスト中止を決定した。当然の如く、この詔書に満足を覚えた部分はこれ以降、反ツァーリズム的<sup>(20)</sup>反政府的運動を終息にむかわせたから、ロシアの政治的気象は大きく変化する。当時、カザン線ストライキ委員会の活動家であった

Д・М・コトリャレンコの場合、詔書は大きな喜びであったが、それは我々がそれを信じたからではなく、それが名誉をもってストを終結する機会を与え、新たな力をもって更なる闘争をなすに必要な息つきを与えたからである、と回想している。<sup>(20)</sup> 実際、右のストライキ委員会はすぐにその「マニフェスト」を出して、詔書で政府が認めなかった諸要求（憲法制定会議召集等）の追究を継続する姿勢を示したのだが、彼の回想はあくまで後日の整理してさめた内容に思える。詔書を知り、狂喜した人々がモスクワ・タガンカ監獄に押しかけ、実力で政治犯釈放を勝ち取ったこと<sup>(22)</sup>に示されるように、あるいは、スイチン印刷工場労働者Д・ミハイロフの回想<sup>(23)</sup>、リヤザンIIウラル鉄道労働者のП・Д・レヴィツキーとВ・П・オルロフの回想等<sup>(24)</sup>がよく物語るように、その時に人民大衆がえた「勝利感」は広範で深いものであったと思える。

前以て指摘すれば、後の議論にとり重要なのは、ここで得たと思われたものが、実際には幻想でしかなかったことが判明することのもつ社会的政治的意味合いであり、その際の人民大衆の反応である。

十月ゼネスト、いや正確には十月一七日詔書後にまず進行したのは労働団体の「合法化」と組織化であった。ペレヴェルゼフは、十月一七日は「同盟」にとり大勝利であり、その名は全ての人々の口にのぼり、詔書とともに「同盟」は合法組織として大都市で公然たる活動を展開し、従来、敵対的であった中間管理層の対応も大きく変わったとい<sup>(25)</sup>う。そして、中央ビュローはロシア技術協会にその事務所を開設した。

特に「同盟」の合法化を決定的に印象づけたのは、十月二一日にその代表団と首相ヴィツテが会談したことであり、彼らの面前でヴィツテは提出された要求につき、採否を吟味してみせたので、一行はついにロシアでも欧米的原理に立脚する鉄道員の協同組合組織が認知されたと考えたのであ<sup>(26)</sup>った。従って、「十月後、鉄道員大衆はストを全く考えなかった。圧倒的大半の者は全ての自由が実現し、鉄道員たちの必要はやがて満足されるだろうことを疑わな

った」という発言は当時の雰囲気を一定正確に伝えていると思える。

この際、鉄道員の動向として特徴的であったのは、路線の主たる駅毎に「ソヴェト」ないし「地方委員会」が自然発生的につくられたことと路線別に鉄道員大会が開催されたことである。例えば、モスクワ<sup>(28)</sup>キエフ<sup>(28)</sup>ヴォロジノ線ではコノトプ駅ゾヴェトやモスクワ駅地方委員会が結成され、十月一四日のサラトフでの「第一回リヤザン<sup>(28)</sup>ウラル鉄道代議員大会」、十月一五日のリュボチナでのクルスク<sup>(28)</sup>ハリコフ<sup>(28)</sup>セヴァストーポリ線とハリコフ<sup>(28)</sup>ニコライ線の鉄道員大会開催のあと、十一月二〇日、南部諸線大会（ハリコフ）、十一月二二日、シベリア鉄道大会（トムスク）が続いた。<sup>(29)</sup>そして、こうした動きを束ねるのに「同盟」中央は無力にみえ、構成諸路線の自律性を尊重するその組織原理が一見、組織的にアナーキーな状態を各線に創出する方向に作用したと思える。もっとも、各鉄道員組織の活動は鉄道員の生活状態改善を図るといふ志向性を等しく持っていて、そのために労資間の調停委員会のようなものもつくられた。<sup>(30)</sup>しかし、ペレヴェルゼフに言わせれば、中央ビュローは次のゼネストに近いことを予感しつつも、それに確信が持てない状態であった。<sup>(31)</sup>

十月一七日詔書がその裏で権力側の反撃を伴っていたことは十月一八日に、獄から解放されたばかりのモスクワ・ポリシェヴィキの代表的活動家バウマンが殺害されたことに象徴された。自由と弾圧の並存という微妙なバランスを孕んだ人民側と権力側の緊張関係（ガルヴィの表現では、「非合法性と合法性の結合」<sup>(32)</sup>）は一月に入ると最初のピークに達した。クロンシタット水兵に対する軍事裁判及びポーランド戒厳令施行に抗議するペテルブルク・ソヴェトが同市諸工場での革命的な八時間労働日導入の勢いに乗って、ゼネストを打ち上げたのである。鉄道労働者は一月二日にワルシャワ線のペテルブルク駅でスト入りして、急行列車を止め、同三日にはニコライ線とバルト線の機関士は列車運行を拒否するなどをしたが、<sup>(33)</sup>「同盟」中央ビュローは全体としてスト参加をみあわせた。やはりペレヴェル

ゼフによれば、新たな鉄道ゼネストにそなえて力を温存したのである。<sup>(34)</sup>

時間の経過とともに、自由と弾圧の均衡を維持するのにさえ非常な精力が要することが労働側にも認識されてくる。息つぎは余りに短かく、自由に身を休める間もなく、「同盟」諸組織は状況への対応に追われることになった。クーシキナ要塞の司令官が技師ソコロフとその同僚たちに「同盟」に参加したかどで、死刑を宣言する事件（いわゆるクーシキナ事件）が発生すると、鉄道員たちの怒りは頂点に達し、ヴィッテに対し死刑中止かゼネストかをせまる抗議電報が殺到した。この場合、政府は譲歩したが、彼らの気持ちはおさまらず、新たな闘争を覚悟するところとなった。<sup>(35)</sup>

次く一月中旬の郵便電信ストは広範な民衆の支持をえたが、特に鉄道員の場合、業務的性格からもこれに深く関わる立場にあり、中でもニコライ線はこのストに熱心で、同線電信士は政府及び個人の暗号電報受け付けを拒否した。<sup>(36)</sup> この動きは一二月二四日から一二月四日まで続き、これにペテルブルク鉄道駅電信士も合流し、一二月初めには「同盟」ニコライ線ペテルブルク委員会が結成され、運動の維持と展開が図られた。<sup>(37)</sup>

ツァーリ政府は徹底した弾圧へと転じた。一月二九日、ツァーリは鉄道員と電信電話局員のストに対し、地元当局に非常措置をとる権限を与え、一月二日には、軍事裁判でそのスト参加者を四ヶ月〜一六ヶ月、その指導者を四年以上拘留する「臨時規則」が出され、同時に運輸相は「同盟」を「禁じられた組織」として鉄道当局がそれと関わらないことを命じた。また、一月四日には、「鉄道戒厳状態規則」が勅令として出され、<sup>(38)</sup> 鉄道管理局、軍隊移動担当者、鉄道憲兵部担当者から成る特別委員会がつくられ、それは懲罰列車を管理した。

一月二八日にモスクワ・ブレスト線の活動家が逮捕され、同三〇日にはカザン線の電信士五名が銃殺されるなど「同盟」をめぐる状況がにわかに緊迫したため、中央ビュローは第三回大会召集を考えたが、集会に伴なう危険性を

考慮して、「同盟」参加の二九路線代表者を一二月五日、モスクワに集め、戦術決定をなす方針を採った。<sup>(39)</sup> 同時期、ペテルブルク・ソヴェト議長フルスタリョフノサーリが逮捕され（一二月二六日）、それに抗議する同ソヴェト多数派は即時ゼネストを主張したが、「同盟」側が一二月五日まで動こうとしないため、ソヴェト側はゼネスト突入を一旦見送った。<sup>(40)</sup> 人々が「同盟」の動向を注目していた。

一般鉄道員は右のクーシキナ事件を契機に新たな運動をおこしつつあり、リガール、バルトール、ペテルブルクワルシヤワなどの各路線は自発的にストに入っており、一二月二日にかの「財政宣言」を出して大量逮捕をうけたペテルブルク・ソヴェトに代り、注目をあびだしたモスクワでは、一二月三日にモスクワ鉄道管理局の全線代表者たちが要求作成に集い、その際、一部代表者から郵便電信ストに連帯する形でのゼネストが主張されたが、事態の流動性を考慮して、その決定は保留された。<sup>(41)</sup>

一二月五日の二九路線代表者協議会（議長はペレヴェルゼフ）で、中心議題となったのは無論ゼネスト問題であった。ペレヴェルゼフはこの時を回想してこう述べる——代表者のほとんどは新たな鉄道ゼネストを不可避とみたが、その成功について皆が確信していた訳ではなかった。中央ビュロー員の多くやペテルブルクから出席した各党派の代表たちも同様で、気分は高揚してはいたが、嬉しくはない（неприятное）感じで、ペテルブルクからの者は労働者はスト疲れしているといった。「再建された」ペテルブルク・ソヴェトが社会主義諸党派と一致して、ゼネストの最終的決定をここへ伝えてこなければ、協議会としてはその即時表明を決しかねた。こうした状況で、協議会としてはソヴェト代議員の依頼を拒否出来ず、鉄道ゼネストを表明することに踏み切った。<sup>(42)</sup>

このように彼の回想はゼネスト決行をめぐる動揺する協議会の雰囲気伝えるが、別の論者たちもニュアンスの相違はあっても、同様な調子でこの協議会を描写している。M・プシカリョーヴァは、協議会はゼネスト宣言問題で決

して一致していず、動揺していたが、大半は一般労働者の革命的気分を押されて、ゼネストに賛成したといひ、又、別の議論は協議会はゼネストの成功を大變疑っていたが、ソヴェトと左翼諸党派はそれを決めており、中央ビュローはそれを避ける可能性を見い出せなかったとする。<sup>(44)</sup> ヤコヴレフ、<sup>(45)</sup> エンゲルスタイン、<sup>(46)</sup> ライヒマン<sup>(47)</sup>は一致して、協議会は戦闘的気分からほど遠く、ボリシエヴィキ（ペテルブルクから来たリュビッチら）が直接鉄道労働者に訴えるところだったので、協議会は慌ててゼネストを認めたと指摘する。

従って、「同盟」は自らすすんで鉄道ゼネストの主導権をとったとは判断しにくい。

一二月六日のモスクワ・ソヴェト会議〔後出〕に出た同協議会代表たちは各線に適当な指令を出すため〔ソヴェト側からの〕スト宣言の合図を待っていると述べた。鉄道側からペレヴェルゼフが「連合ソヴェト」〔後出〕<sup>(48)</sup>に入った。

一二月七日、「同盟」中央ビュローと二九路線協議会の名で、全国の駅、鉄道労働者職員にあてて、大概次の内容のよびかけ<sup>(49)</sup>が出された。

政府は十月一七日詔書を無視しており、我々の経済的法的状態は改善されず、むしろ悪化している。

同志諸君、これ以上我慢することは出来ない。破産寸前の政府が我々を新たな闘争へと駆り立てているのだ。二九路線協議会は中央ビュローとともに、ペテルブルク及びモスクワのソヴェトの決定に合流し、一二月七日からの政治ゼネストを宣言する。

これを宣言する我々は満州からの帰還兵をひきうけ、政府がやるより揺かに速かに軍をロシアへ戻そう。満州のわが兄弟兵士によびかけ、その帰路に我が組織への協力を求め、我々が樹立する秩序を支持してもらおう。旅客は彼らの目的地の最寄りの町へ運ぶようにしよう。更に食糧を飢えた農民にもたらそう。

古い政府からはもはやこれ以上何も期待出来ない。普通・平等・直接・秘密投票による憲法制定会議のみがロシアを犯罪的な政府がつくる状態から解放するのだ。我々は一人ではない。都市プロレタリアート、勤労農民そして軍隊及び艦隊の自覚的な部

分はすでに人民の自由 (СВОБОДА)、土地そして束縛されぬ状態 (БОЯ) をもともと立ち上っているのだ。

後から振り返るとこのよびかけが「同盟」のいわば白鳥の歌となる。ペレヴェルゼフを加えた「連合ソヴェト」がこの七日に逮捕されたこともあり、「同盟」中央ビュローは蜂起時にその姿を見せない。一方、二九路線協議会は「中央ストライキ委員会」をつくるが、具体的動きをやはり見せない。<sup>(50)</sup>

更に、その後の事態の展開にとり有意味であったのは、右の協議会から戻ったペテルブルク鉄道管理局の代表たちに、ペテルブルク・ソヴェトが工場側の準備の悪さを理由に、八日までスト突入を延期するよう依頼し、鉄道側が協議会決定を破って、それに同意した<sup>(51)</sup>ことである。つまり、七日、ニコライ線ペテルブルク委員会はニコライ線全駅にこう打電した――

ニコライ線委員会はモスクワにおける鉄道代表者協議会の<sup>(52)</sup>決定により、一二月八日正午に従来提起した要求が満されるまで鉄道の運行を停止する。

これと同時に同委特別会議はおおよそ次の内容の檄を採用した――

同志諸君。国は破綻の際にあり、我々の正当なる要求を認める代りに、我々を投獄や流刑でおどしている。運輸省が合法とみなした「同盟」は犯罪的結社と宣せられた。権利を守りに立ち上がろう。もはやそのような政府からは何も期待しえないのだ。国を救えるのは自由に選出された人民代表の憲法制定会議のみである。中ば飢えた農民を死から救うのはゼムストヴォのみであり、全ての国を救うのは人民の意志 (НАРОДНАЯ ВОЛЯ) のみである。<sup>(52)</sup>

これら七日に出たナロードニキたちの用語による二つの檄、そして一つの電報はゼネスト突入を言って、蜂起には言及していない。また、内容的には憲法制定会議実現を最高目標としている特徴があった。いずれにせよ、政府側はスト突入の一日延期をとらえて、七日に「同盟」員の大量逮捕を行ない、後述するようにニコライ線を軍隊で容易に占拠することになった。

### 三 兵士の動向

日露戦争に関わって陸軍主力は極東にあり、ツァーリ政府は、ロシア史の慣例にならって、手薄となったヨーロッパ・ロシア部分にカザーク〔コサック〕予備軍を投入して治安に万全を期したが、そのカザークも歩兵と同様に不満を蓄積しており、現にクバン、ドン、更にはシベリアのそれは一九〇五年十月以降、反乱していた。<sup>(1)</sup>

満州派遣軍は使えず、カザークも反抗的であったから、体制の維持はいきおい国内主要拠点に配備した守備隊(гарнизон)に依存するところとなった。

モスクワ守備隊の場合、一九〇五年直前に、歩兵擲弾兵九連隊、騎兵二連隊、砲兵擲弾兵一旅団、工兵三大隊、そして工兵廠から成り立っていたが、同年夏に、これらのうち工兵部分と砲兵の一部を極東へ回し、新たに工兵予備二大隊を導入した。しかし、守備隊の不足を感じた当局はさらにドン・カザークを補充した。<sup>(2)</sup>

一九〇五年の秋から冬の時期に限ると兵士の反乱は一月後半にピークに達していた。つまり、十月末に一五件、一月前半に四四件を数えたそれは同後半に八九件に増加して、二月前半に五〇件に低下した。二月後半は一六件である。我々が検討すべきモスクワ武装蜂起の二月前半期の内訳は、一五件が満州とシベリアからヨーロッパ・

ロシアへの帰途で、一事件がカフカースで各々発生し、残るほとんどが一二月第一週に中央部ロシアで起きている。<sup>(3)</sup>  
モスクワ蜂起時の兵士の動向は全国的には下降線にあった兵士革命運動の中に位置づけられる。

十月一七日詔書後、反攻の機会を狙っていたツァーリ政府は十一月〜十二月、バルト諸県へ最初の懲罰隊を派遣した。ペテルブルクの最強軍団で編成された同隊はこの革命に対して体制側がとった最大の軍事行動となり、約一〇〇〇人の犠牲者を出して、一九〇六年一月末までに同地方は鎮圧された。モスクワ蜂起以前にこのバルト地方以外にこうした組織的計画的な懲罰がなされたのは唯一シベリアにおいてであったが、これらいわば周縁地方での軍事行動は体制維持に直接役立つとともに、全国に政府側の革命に対する攻勢を印象づけるアピール効果も大きかったと思われる。この点を兵士に限って更に言えば、十月一七日詔書が軍隊秩序を混乱させ、士官の權威性を低下させる作用を果して、体制にとり好ましからざる効果を發揮しつつあったことに対し、それらを打ち消す機能もあったと考えられる。

詔書発布時の兵営における雰囲気の一面については、当時モスクワ守備隊ロストフ連隊にいたB・ウリヤニンスキーが回想している——〔十月一八日に〕我々の教導隊に一人の士官が輝いた顔をして走ってきて、こう説明した。ロシアに憲法が下賜され、今から我々全ては自由な市民として、自己の政治的見解を表明し、公然と集会する権利を持つ。やがて、国会が召集されるだろう、と。皆とこの喜ばしい出来事を祝ってから、彼は我々に家へ戻って休むように命じた。通りは何か全くただならぬ様子で、それまで人気がなかったモスクワの通りは巨大な群集でうまり、彼らは赤旗を持ち、様々に革命歌を唄っていた。誰もこれを止めることはなく、警官もほとんどおらず、至る所で詔書について議論する人ばかりが見られた。<sup>(4)</sup>

一方、政府の反撃にさらされた革命側は、まさしく反乱か懲罰か、諸刃の剣としての兵士への対応をせまられた。

彼らがもし蜂起を想定すれば、兵士集団を自陣営に取り入れ得るか否かが、決定的な意味を有することは容易に理解しえた。そして、クロンシタット、セヴァストーポリ、キエフと続く十一月の一連の兵士反乱を眼前にして、彼らは兵士の支持を期待出来るものとみなし出した。一月後半期、すでに革命三党派は各々、軍事組織を持ってはいたが、しかし、それらが直接兵士を工作して、反乱に立ち上がらせた様子はなく、一月二五日の第一ドン・カザーク連隊の二大隊が要求リストを出して、パトロール出動を拒否したことから始まる当該期モスクワ守備隊における動揺は、むしろ様々に伝わってきた他所での兵士反乱の情報に刺激された兵士独自の動きであったと思える。<sup>(5)</sup>

この時期、モスクワ守備隊兵士には弾薬だけでなく、武器をも革命派へ供給する者、労働者集会へ出席する者などがいたが、<sup>(6)</sup>そうした革命への共感を最も強く表明したのは工兵たちであった。一月二六日、第三、第五予備工兵大隊は隣接した第二二一トロイツェルギエフ予備歩兵連隊の大隊と合流して集会し、要求を提示した。この際に契機となったのは革命的な演説をした工兵の逮捕で、同僚たちはその即時釈放を求めると同時に他の要求も出したのである。<sup>(7)</sup>後にみる一月二七日のモスクワ・ソヴェト会議には工兵が出席して、武装蜂起を説き、武器庫のソヴェトへの引き渡しを述べたが、ソヴェト側は時期の悪さを理由にこの提案を斥けた。<sup>(8)</sup>従来、モスクワ守備隊での反乱主唱部は砲兵たちであったが、その大半が極東へ派遣されたこと、更にすでに触れた守備隊への工兵補充にあたり、各隊の司令官らが「期待出来ぬ分子」を送り出してきたため、革命的な工兵が集積していたことが彼らの動きを目立たせる結果となっていた。<sup>(9)</sup>

その他の部隊でも工兵の要求を参考にして反乱を開始し、一月二九日から二月二日の間、擲弾兵連隊等で動きが出たが、これらの動向に共通したのは各連隊毎の要求追求に運動がとどまっていたことであった。これらのうち、一二月一日の第四擲弾兵連隊の集会には同司令官が出てきて、一二月六日にはツァーリが「兵士と農民に対する慈悲

に関する詔書」を出すから、行動を自重すべきことを説いた<sup>(10)</sup>。

このようなモスクワ守備隊各連隊の個別的運動の中で、最も注目されたのが第二擲弾兵ロストフ連隊（以下、単にロストフ連隊）の動向であった。一八世紀初頭に創軍され、最も古く、数々の武勲に輝くこの連隊では、一月に入り、司令官が兵士給料を巻き上げたことがあり、さらに二七日には工兵の動きを鎮圧すべく出動命令が下り、兵士たちに不満と嫌気が鬱積していた<sup>(11)</sup>。そして、この時点までに革命諸党派との結びつきが強まっていた。後述する「連隊委員会」議長となったポリシェヴィキのИ・Я・シャブローフによれば、連隊内にはエスエル・サークルと二つの社会民主党系サークルがあり、中でも下士官チエルヌイフが第一、第二大隊を精力的に煽動した結果、エスエルのものが最大級となっていた<sup>(12)</sup>。反乱が開始された一二月二日の一、二週間前に、シャブローフとエスエルのアガフォーノフが市のエスエル軍事組織について情報交換をした際、アガフォーノフはモスクワ守備隊の気分は急速に革命化しており、それを足場に蜂起をやるべきであるが、時期的には一月中旬になろうと述べ、これにシャブローフも同意していた<sup>(13)</sup>。

さて、ロストフ連隊の蜂起開始をめぐり、説は分かれている。ウリヤンスキーは、一二月一日のエスエル党軍事組織集会で蜂起に話が及んだ時、どの連隊がその口火を切るかについて、出席したロストフ連隊志願兵ベロウソフが同隊から始められると発言したために、翌二日の決行が定められた、とする<sup>(14)</sup>。

これに対して、シャブローフは異を唱え、一二月二日朝、連隊司令官シマンスキーが好ましからざる下士たちの逮捕を開始したので、中隊ごとに「武器を取れ」と伝えると、蜂起になった、という<sup>(15)</sup>。

右にみたように、二日の一、二週間前に一月中旬頃の蜂起を考えていたエスエル党軍事組織がウリヤンスキーの言うような決定をなした事はにわかに信じがたい。警察資料はこの反乱を志願兵シャブローフらが企てた煽動をその

根拠とみているし<sup>(16)</sup>、一二月二日付で、陸軍相にも「志願兵の煽動により、二中隊〔正確には大隊〕は他の兵卒をテロ手段に訴えて威嚇した」と同趣旨の連絡が入っている<sup>(17)</sup>。この点で、ブシネルは「彼〔アガフォーフ〕と他の何人かの兵士が逮捕された時、連隊は自発的に反乱した<sup>(18)</sup>」と書いている。筆者はここではシャブローフ説をとっておく<sup>(19)</sup>。

まず反乱したのは第一、第二大隊で、それに第三、第四大隊と機関銃中隊が合流した。反乱兵たちは士官を兵営から追い出して、各中隊から一名を選出し、連隊を「運営する」ための連隊委員会 (ПОЛКОВОЙ КОМИТЕТ) あるいは兵士委員会<sup>(20)</sup> (СОЛДАТСКИЙ КОМИТЕТ) を結成し、さらに要求の作成に着手し、あわせて連隊を防衛するために機関銃を各所に配した。この二日の夜、兵士の気分は高揚し、実戦の前にやるように、彼らの多くが下着を替えた<sup>(21)</sup>。同夜、モスクワ軍管区に各部隊司令官が集会し、対策を講じたが、誰一人として反乱の拡大をおそれ、自分の兵士を鎮圧に差し向けようとはせず、トヴェーリから騎馬砲兵をよぶことのみを決めた<sup>(22)</sup>。

一二月三日、ロストフ連隊兵営の集会で、連隊委員会が徹夜で作成した要求が報告された。それは憲法制定会議召集、土地の社会化、死刑廃止、政治犯釈放、軍隊の警察的任務の廃止、兵役を二年に短縮、生地での軍務、極東からの軍隊帰還〔促進〕、当該蜂起参加者への恩赦を内容としており、連隊当局へ提出された。この日、兵営外へ打って出ることが再々議論されたようだが、結局は実行されない。この点で、ウリヤンスキーは我々にはそうした力量はなかった<sup>(23)</sup>とい、シャブローフは街頭行動を行ない鎮圧されたキエフ工兵の例〔一月一八日〕があり、それに乗り気でなかったと回想する<sup>(24)</sup>。右の要求が一部の新聞に載ったこともあり、他連隊の動向が注目された。

目立ったのは兵士ソヴェト結成であった。三日の夜、最初にして最後の会議がおそらくロストフ連隊でひらかれた。それには四擲弾兵連隊、三工兵大隊、一カザーク連隊そして革命三党派軍事組織から一三〇人程が参加したといわれ、各隊の代表は兵士たちが革命に共感的で、彼らは市民の蜂起を支持し、抑圧することはしないでであろうと口々

に述べたといふ<sup>(25)</sup>。

ロストフ連隊兵士たちと外部の者との接触では、ウリヤノフスキーによって、次が観察された。兵士集会に出たボリシェヴィキとエスエルの煽動家は演説して、兵士らに極めて不愉快な印象を与えた。つまり、革命のテーマ全般を語る彼らの言葉は兵士たちには理解不能で、しかも不用意なことに、彼らは何回ともなくツァーリに否定的に言及した。また、やってきた婦人煽動家が語り、「女もまた俺たちを教えようとした *Баба тоже хочет нас учить*」ことは彼らの好まぬところであった。さらにある煽動家がピストルをバンドにつるしていたことも兵士には不作法に見えた<sup>(26)</sup>。

ガルヴィもこの辺のことについて、メンシェヴィキとボリシェヴィキが並行して軍隊工作をやったのは明らかに無意味であり、兵士たちに我々の相違など分るうはずはなかったと書いて<sup>(27)</sup>いる。連隊兵士と革命家との出会いがうまく行かず、むしろ逆効果の観があった<sup>(28)</sup>。

モスクワ軍管区参謀本部長が一八九三―六年徴兵兵士を予備役とし、さらに一八九七―八年組を除隊させるだろうという士官らの話<sup>(29)</sup>や他の連隊では一九〇一年徴兵兵士の除隊がなされているといううわさ<sup>(30)</sup>もこれ以上反乱を続けければ「恩恵」にあずかれぬと考える兵士に大きく作用したと思える。また、彼らは一二月六日にツァーリがなすであろう約束にも期待をかけていた。

一二月四日朝、連隊委員会は集会を組織したが、出てきた兵士らは、自分たちを公然とツァーリに敵対させようとしているとして、運動指導者たちに強く不満を述べ始めた。特に第三、第四工兵大隊の兵士たちはこれ以上の反乱継続を望まないと宣言して大隊へ戻り、司令官の命を受けた兵士が連隊委員会を逮捕した<sup>(31)</sup>。

かくしてロストフ連隊では五七人の逮捕者を出して、わずか二日間の反乱は終わった。反乱は「日本人とユダヤ人が

組織した」とする風説が広まった。連帯委員会は買収され、彼らの所で大金が発見されたというのである。<sup>(32)</sup> この敗退とともに兵士ソヴェトは革命の舞台から退いてしまう。

以上、簡単に見たようにロストフ連隊の反乱自体は格段に顕著な内実を伴ったものでは必ずしもなかったが、それがより重大な意味を有したのは革命派が政府の露骨化した弾圧（特に一二月三日のペテルブルク・ソヴェト執行委員会逮捕）への対応を早急に決さねばならない時に発生したからである。

革命派がロストフ反乱を傍観していた訳ではなかった。このことは右に見たように、兵士と煽動家の出会いが一つとして示しているが、更には、例えば、ボリシェヴィキのプレスニャーハモフニキ地区責任組織者であった3・ドッセルは、彼のモスクワ委員会でその反乱に対し十分な検討をなす時間がなく、たまたま居合せたメンバーが工兵指導に煽動家スタニスラフを派遣することだけを決めた。しかし、反乱は支援する間もなく鎮圧された、と回想している。<sup>(33)</sup> 同じくレフォルトヴォ地区責任組織者A・ヴォイトケヴィチも同様な指摘をしている。<sup>(34)</sup>

しかし、実際には十分な対応がとれなかっただけでなく、革命派はロストフ反乱を契機にゼネスト、そして蜂起をなすことに躊躇していたと思える。<sup>(35)</sup>

だが、蜂起決行へ最後のつめの段になると、事態は急転回を見せることになる。これらの点については節を変えて述べたい。

#### 四 ソヴェトと蜂起の決定過程

ここまで議論が進んでくると、少なくとも形式的には蜂起の指導体となったと考えられるモスクワ・ソヴェトに登

場を願わなくてはならない。

従来、最もまとまった当該期のモスクワ・ソヴェト史を書いたヴァシーリエフ<sup>1</sup>ユージンは、ペテルブルク・ソヴェト等に比し、遅れて出現したこのソヴェトを専門職業家連盟、「同盟」、そしてそれらの「ストライキ委員会」に対抗すべく、メンシェヴィキとポリシェヴィキが一致して実現を図ったものと規定している。彼によれば、一九〇五年一月初旬、両派のいわば共同行動調整機関としてロシア社会民主党モスクワ連合委員会（Федеративный комитет）が結成され、ポリシェヴィキからB・Л・Шанツель（マラート）と彼、メンシェヴィキからイスフとザレツカヤ（後にイサコヴィッチと交替）がそれに加わった。この連合委が中心となって、エスエルにも呼びかけて、一月二日に第一回ソヴェト会議をもったが、その執行委員会は三党派各二人（連合委員会の四人とエスエルからルドネフ〔バーブキン〕とゼンジーノフ）、地区代表労働者八人の計一四人構成となり、さらにこのうち党派の六人が幹部会を形成したため、実質的にモスクワ・ソヴェトは社会民主党系がリードするところとなった。<sup>1</sup>このソヴェトは蜂起までに計四回の会議を開催したが、代議員は二百人規模で、当時の労働者がメンシェヴィズムとポリシェヴィズムを明確に区別しえなかったこともあって、彼らの大半は無党派であった。<sup>2</sup>

組織的には、このモスクワ・ソヴェトは地区ソヴェト（районный совет）を従えた。モスクワ市一七地区全区にこれが結成された様子はないが、ザモスクヴォレーチエ、プレスニヤ、ハモフニキ、ブトウイリスキーなどに存在したことは確かめられている。ガルヴィはペテルブルクでは全市ソヴェトが強力な地区ソヴェトは大変弱体であったが、モスクワはその逆で、なかでもプレスニヤ<sup>3</sup>ハモフニキ地区ソヴェトはモデル的活動をなしたとする。<sup>3</sup>

地区ソヴェトは当該地区工場の実態を検討し、ソヴェト執行委の指令の具体的実施方法を考えたが、指令の解釈をめぐり執行委と対立することがありえた。<sup>4</sup>さらに後の議論のために述べておけば、地区ソヴェトの行動は多分に自律

的であり、蜂起時に地区相互間及び地区Ⅱ中央間の連絡が分断すると、それはなかば自動的に当該地区の運動指導部となるよう運命付けられていた。早い段階の一月二五日には、例えば、プレスニヤⅡハモフニキ地区ソヴェト会議は一一工場から四五人を集めて、工場管理をやり、集会の自由を得る必要を討議している。<sup>(5)</sup>

モスクワ・ソヴェトは結成後すぐに兵士工作問題に出会った。例の「労働博物館」で一月二七日に開催されたその第二回会議は前日のペテルブルク・ソヴェト逮捕の報を受けて政府の攻勢本格化を知り、緊張の中で、折から始まった工兵を中心とする兵士運動との共闘が検討されたが、実際の所、その方向性は確認されても具体的対応を拱いた。ヴァシーリエフⅡユージンによれば、この日、ボリシェヴィキ・モスクワ委員会はレーニンの農業綱領修正案を検討していて、そこに突然、兵士反乱の知らせが飛び込んできたといった工合いで、その「予期せぬ行動」の理由を掴みかねて、同委執行委議長シャンツェルはこの機会に兵士と連帯して動くことを頭から問題とはしない。彼らは兵士との結合が大変に弱く、圧倒的に農民から成る軍隊へ接近する力に欠けていることを自覚していた。<sup>(6)</sup>

さらに、ここでソヴェトをめぐる論点の一つとなるのがモスクワとペテルブルクの関係である。ソヴェト運動の先頭を切っていたペテルブルクでその議長ノサーリが逮捕された後、一月二六日の会議で新たに「執行ビュロー」が選出されてトロツキーとオボフ工場労働者Ⅱ・ズルイドイネフ及びヴヴェジエンスキーⅡスヴェルチコフの三人集団指導体制として同ソヴェトは再建され、一月二日に「財政宣言」を打ち出したが、翌三日に、二六七人の大量逮捕で壊滅的打撃をこうむった。その際、当局が押収した三日の執行委員会議事録には、執行委が一月五日に予定されている「同盟」〔会議〕と連絡をとって、組織的ストに即刻入り、それを武装蜂起へと至らすこと、とあった。<sup>(7)</sup>

このようにペテルブルクでは、当時モスクワに一步先行してゼネスト↓武装蜂起の実施を図ろうとしていたが、ソヴェトを失ったペテルブルク側はその実現をモスクワに頼ることになる。

一二月四日、ポリシエヴィキ中央委員会の代表としてペテルブルクからモスクワへリュビッチが来て、ポリシエヴィキ・モスクワ委員会に蜂起の主導権をとるように言い、大きな議論になった。この時点で同委は自己の力量を疑って、蜂起準備は完了していないと考えていた。リュビッチはモスクワが動けば、ペテルブルクと「同盟」はそれを支援し、孤立させることはしない、と説得に努めた。<sup>(8)</sup>

こうした説得がモスクワ・ソヴェトを蜂起に踏み切らせるのに力があつたことはおそらく確かであろうが、この点で更にそれを促したのは当時のモスクワ労働者たちの積極性であつたと思える。例えば、一二月二日のプレスニヤハモフニキ地区ソヴェト会議（一一企業四三人出席）は軍隊兵士の動向について検討して、兵士革命運動をフォローし、それをプロレタリアート運動に協調させること、モスクワ・ソヴェトに武装蜂起の可能性を伝達し、工場集会で兵士との連帯を煽動することを確認している。ここでは、絹織物工場ジロー（労働者三六〇〇人）の代表が幾つかの連隊の兵士と同工場労働者が接触しており、前者が後者に武器取り扱い方法を教授していると報告した。<sup>(9)</sup> また、労働者らは街頭行動をすでに開始しており、一二月三日には、警官との間で武力衝突をおこし、警官一名を死亡させた。警察資料は逮捕したその発砲者は労働者武装部隊〔後出〕と推定した。<sup>(10)</sup> 一二月四日に二八〇人が参加した電気機械組立・据付け工集会ではロストフ連隊の反乱について煽動があり、全員が最後まで闘う意思を表明した。<sup>(11)</sup> こうしたモスクワの労働人民の高揚も革命派たちの重い腰をあげさせるのに寄与したと思える。

一二月四日のソヴェト第三回会議はまず「財政宣言」への署名を決定した後、兵士運動への対応を議論したが、ロストフ反乱を全市的蜂起への契機にしえなかつた執行委及び革命諸党派に対する非難が多くの労働者代議員から相次いだ。兵士の気分はまだ高揚しているとする状況認識のもと、兵士の革命的気分の衰退と政府の攻勢とを阻止するために、ソヴェトと革命諸党派はゼネスト<sup>11</sup>蜂起を即時に提起することを強いられるところとなつた。しかし、彼らは

ここでも独自にそれへ踏み切る自信はなく、翌五日に全工場労働者の集会でこの問題を検討し、そこでの労働者の意向に依拠して、次のソヴェト会議で最終決定をなすことにした。<sup>(12)</sup>

この四日にメンシエヴィキ全市協議会が二五〇人の出席をえて開かれた。ペテルブルクでは労働者がゼネスト入りをめざし、その勢いをかろうじて抑制していること、ロストフ連隊では多数の逮捕者を出したが、兵士の気分は逆に高揚していること、モスクワの工場労働者はいつでも動ける状態にあること、等を特に印刷工労組代表が発言し、全体としてはメンシエヴィキが運動を主導していることを示すために、それに踏み切るべきことを確認した。<sup>(13)</sup>

中ば予想されたように、五日の労働者集会は単に形式的なものでしかなく、労働者は高揚し、蜂起を当然視する雰囲気にあつた。<sup>(14)</sup>五日の夜には、プレスニャとハモフニキの幾つかの交番が労働者により襲撃され、警官四人が死傷した。<sup>(15)</sup>

五日の夜、フィードレル実科学校で行なわれたポリシエヴィキ全市協議会では、軍事組織者のA・H・ヴァシーリエフは革命側の軍事力は九〇〇と一〇〇〇人(ポリシエヴィキとエスエル各三〇〇、メンシエヴィキ一〇〇、他三〇〇)であり、一方、モスクワ守備隊一万四〇〇〇人のうち、政府に忠誠なのは四〇〇〇人と推定されると発言した。ここに出席した「同盟」代表は自分達はゼネストを決定したといい、イスフもメンシエヴィキ協議会はそれを認めたと報告し、ペテルブルクからのリュビッチもモスクワ蜂起をうながした。現場にいあわせたヴァシーリエフユージンやヴォリスキーは、たとえ蜂起は失敗しても、それは避けられないと思ったと回想しているが、この言葉が最も良く雰囲気を反映しているとみられる。蜂起を逡巡する部分とそれを促す部分との間で激しく意見交換がなされたと思えるが、その具体的内容は分らない。いずれにせよ、蜂起への発展をふくんだゼネストを開始することが確認された。<sup>(16)</sup>

だが、ここで、行動計画が作成された様子はなく、シミット工場労働者武装部隊長M・ニコラエフはこのことをそ

の回想で断言し<sup>(17)</sup>、ボリシエヴィキ・ロゴーシカ地区の活動家であったИ・М・ゴループとП・Γ・テレエフは五日の右協議会もボリシエヴィキ・モスクワ委員会も具体的指令を出さなかったから、同地区委はすでにスト入りしていたグジョン工場労働者をつかつて就業している工場を「はぎとる」ことなどを含む独自の行動計画を作成したという<sup>(18)</sup>。

たしかに、ヴァシーリエフ・ユージンは一二月六日朝の連合委員会では彼が作成した蜂起案がそのまま認められた<sup>(19)</sup>というが、その具体的内容は十分に明らかになっていない。ここで検討されたのは、同日夜に予定されていたソヴェト会議に出すべきストライキ声明案であり、ガルヴィによれば、ボリシエヴィキ側はゼネストと蜂起を同時によびかけることを主張し、メンシエヴィキ側は同時に蜂起を言うことに反対し、結局、妥協して、ゼネストをよびかけるが、その際、出来る限りそれを武装蜂起へと転化しよう努力することで一致した<sup>(20)</sup>。この場合運動の指導主体は少くとも形式的にはソヴェト執行委しか考えられなかったが、これは実質的に連合委と同義であったため、エスエルの力量と資金を活用するために、メンシエヴィキが「情報ビュロー」を指導部とする提案をなし、これに連合委の他、エスエル二人と「同盟」一人を加えることにした<sup>(21)</sup>。

六日夜の第四回ソヴェト会議はここまでいわば済し崩し的に進んできたゼネスト、そして蜂起決定を最終的に確認する場となった。「情報ビュロー」創設案に対して、エスエルはソヴェト執行委、「同盟」、三党派各二人から成る「連立ソヴェト」案を対置したが<sup>(22)</sup>、敗退した。翌七日正午を期して、ゼネスト突入が決定された<sup>(23)</sup>。そして、檄「全ての労働者、兵士、そして市民へ」が採択された。その全訳を次に示す――

同志の労働者、兵士そして市民の諸君！

労働者階級がツァーリ政府から様々な自由の約束と個人の「真正な」不可侵性を力でもぎ取った十月一七日以降、政府側からの暴圧は止まないだけでなく、強化されて、以前と同様に人間の血が流されている。

制約されない言論を聞けるはずの自由な集会は武器で追い散らされている。労働組合と政治結社は厳しく迫害されている。自由な新聞はすでに一度に数十が閉刊されている。ストライキは投獄でおどされている。

そして、ロシア市民の本場に「不可侵的な」個人に対しては、血液が血管で凍るような暴圧と嘲弄がなされている。再び監獄は自由を求める戦士で一杯である。

あらゆる地方と県に戒厳令が宣せられている。

無慈悲にも、飢えた農民たちは虐殺され、銃殺されている。

兄弟殺しになりたくなくて、自分が属する人民に合流した水兵と兵士は獄で身を腐らせ、破滅し、殺されている。

もし十月だけで政府のために流された血と涙の全てを集めれば、それはそこで溺れてしまう程だ、同志よ！

しかし、異常な憎悪をもって、ツァーリ政府は労働者階級に襲いかかっている。資本家たちと同盟した政府は数百数千の労働者を街頭へ抛り出し（「解雇し」、貧困と餓死を運命づけている）。

政府は数十人、数百人の労働者の代議員と指導者を投獄している。

政府は社会民主労働党とエスエル党の代表たちに対して、ある「例外的な」方策を採用している。

政府は改めて黒百人組を組織し、新たな大量殺人とポグロムでおどしている。

革命的プロレタリアートはツァーリ政府の嘲弄と犯罪をこれ以上我慢できず、ここに政府に対する決定的かつ容赦のない戦争を宣言するものである。

同志の労働者諸君。我々、諸君らに選ばれた代議員、ロシア社会民主労働党のモスクワ委員会、モスクワ・グループそしてモスクワ地方組織及びエスエル党モスクワ委員会は政治ゼネストを宣言し、一二月七日の水曜日、正午を期して、諸君らがあらゆる工場、あらゆる市及び政府の機関に於て就業を停止するようよびかけるものである。

犯罪的ツァーリ政府との容赦ない闘争万才！

同志の兵士諸君。諸君は我々の血を分けた兄弟、我々と同じ母であるところの苦難の多いロシアの子供である。諸君はすでに共通の闘争に参加して、このことを気付き、確認している。プロレタリアートが嫌悪すべき、人民の敵であるツァーリ政府に決

定的な戦争を宣言した今、諸君たちも決然と勇敢に行動してくれたまえ。自己の、血に飢えた当局に従うことは止め、それを追いつき、逮捕したまえ。自分たちの間から期待出来る指導者を選出し、武器を手に蜂起した人民に合流したまえ。労働者階級とともに常備軍と全人民的武装との解隊〔原語は распушения この個所は意味が通じない。「常備軍の解隊と全人民的武装」であろう〕を達し、軍法会議と戒嚴令の廃止を得たまえ。

革命的プロレタリアートと革命的軍隊の同盟万才！

共通の自由に対する闘争万才！

そして、広範な自由を真に求める市民諸君。個人的参加と共同の資金とにより、出来るだけ蜂起した労働者と兵士を支援してくれたまえ。プロレタリアートと軍隊は全ロシアと全人民の自由と幸福のために闘っているのだ。ロシアの全ての将来がのるかそるかなのだ。つまり、生か死か、自由か隷従かだ。

結合された力で我々には犯罪的なツァーリ政府を覆えし、普通・平等・直接・秘密投票による憲法制定会議を召集し、民主共和国を確立するであろう。そのみが我々に広範な自由と個人の真正な不可侵性を保障できるのだ。

同志の労働者、兵士そして市民諸君、闘いに勇敢であれ！

犯罪的ツァーリ政府打倒！

ゼネストと武装蜂起万才！

普遍的憲法制定会議万才！

民主共和国万才！

ゼネストと武装蜂起を手段として、人民代表制的な憲法制定会議を制定し、それを通じて民主共和国の実現をめざすことをうたったこの檄の署名者はモスクワ・ソヴェトとボリシェヴィキ、メンシェヴィキそしてエスエルの各モスクワ組織である。

蜂起の決定過程でとりあえず明らかかなことは、逡巡を重ねつつの済し崩しの決行に至ったこと、このことと大きく関連して、全般に準備の悪さが目立ち、ゼネストから蜂起へどう成長転化させるか具体的プログラムに欠けていた

こと、<sup>(24)</sup>しかし、その一方では革命三党派と「同盟」のいわばゆるい統一戦線が結成されたことである。

だが、こうしたゼネストへの動きに連動して、中間層は十月程動かない。これまでのラジカルトリベラルの共闘は結果的に見て、ここで終る。

## 五 蜂起の過程

やや前置きが長くなったが、以上を前提として蜂起の過程をみたい。

蜂起という現象は極めて多くの要素から構成されていることは容易に想像され、この場合も例外ではない。それぞれの関連資料はその極めて限定された局面を、それも過度の強調をもって示す傾向にあるから、自ら一定の整理を加える必要がある。

通例、モスクワ蜂起は一二月七日に開始されたとされるが、筆者はこの点で格別の異論はない。しかし、その終期は論者により様々で、筆者はとりあえず一九日としたい（理由は後述）。そして、運動の進展状況に照してこの一三日間に四つの区分を与えたい。ただし、最終期は節を変えて述べることにする。

蜂起の参加主体は指導部、労働者武装部隊、工場労働者、鉄道員、兵士そして一般住民とこれまた様々であったが、少なくとも指導部の動向をもって蜂起の全体像に代置することは避けたい。可能な限り、一般住民の動きにも注目したい。

また、蜂起の拡がりないし空間は、運動の密度において均質でなかっただけでなく、蜂起の過程でそれは分断されて個々に存在したと推測される。市周縁部分、特にプレスニャ地区は分離して検討を加えたい。また、この蜂起は市

郊外へも波及していたことにも着目する必要がある。

右の事柄は叙述にあたつてのいわば形式的整理をいつている。更に重要な点として、蜂起主体の動向をその内的論理に即していかに把握するかという問題がある。今回、筆者が利用しえた資料は、運動形態についてはかなりよく示すが、もう一步踏み込んだ意識、思想といった側面については材料の提示に乏しい。従つて、本論は中ば自動的にこの面への分析が弱いことは前以て断つておかなくてはならない。分析の方法論とともに、この点の追究はさらに今後の課題としたい。

(一) ゼネスト突入期（一二月七—八日）

七日、正午を待たず、朝からモスクワ各地でストが開始された。工場は次々とスト入りし、またたく工場労働者五万人が罷業した。市電も朝から止まり、やがて全市が停電した。ガスの供給は続いたが、厳寒の中、その停止を重大視した市当局はソヴェト側とガス工場の稼動につき交渉に入った。銀行金融機関の従業員代表者大会が開かれ、そこに出たソヴェト代表は十日まで営業して、希望者に預金を引き出させることを主張し、それを私立銀行にとり破産行為とみる従業員たちと激しく対立した。電話は通じていたが、正午から電信・郵便も停止した。ソヴェト執行委は次の決定を出した。①七日にゼネストに加わらなかつた工場を八日朝、はぎとる（スト入りさせる）こと ②毎朝、工場集會のこと ③毎日、地区ソヴェト集會でソヴェト執行委の決定を伝えること ④毎日、全体集會のこと ⑤毎日、「イズヴェスチヤ」を出すこと ⑥工場資産を労働者が管理すること ⑦喫茶店を条件付きで開けること ⑧消費組合店も同様のこと ⑨スト中は労働者は部屋代を支払わぬこと ⑩工場の暖房に注意のこと。<sup>(1)</sup>

多くの論者は正午から一斉ストになったとして、この朝からの自発的なスト突入に注意を払わない。しかし、この

ことは一つの論点となるべきで、エンゲルスタインは例外的にこれに言及し、祝日のあと仕事に戻ることがいやだった点と鉄道労働者の動きが全般的雰囲気に影響したとだけ指摘している。<sup>(2)</sup> 筆者としては、さらに、ソヴェトの六日夜の決定が様々なチャンネルで各地に伝えられ、正午を待たずに、人々が動き出した面もあるだろうと思える。

七日に最大級の集会をやり、最も組織的な動きをみせたのは鉄道員たちで、即日、モスクワ鉄道管理局のニコライ、リヤザン、ウラル、キエフ、ヴォロネジの三線を除く全線がストに入った。最初にスト入りしたのは、十月の時と同様に、モスクワ、カザン線であった。同線「ソヴェト」は官営鉄道全駅、「同盟」全支部及び労働者ソヴェトへゼネストに合流すべく檄を發したが、その際、病院列車と極東からの帰還兵列車を通すこと及び権力側の電報受け付け拒否を指示した。<sup>(3)</sup>

すでに指摘したように、蜂起実行にあたり革命派は兵士の動向を最も注目していたが、このことは権力側も十分に認識していた。モスクワ守備隊当局は七日のスト情報を事前に入手し、六日には兵士の給料を少額上げるとともに、酒と腸詰をふるまって、その慰撫に努め、<sup>(4)</sup> 七日朝、全守備隊に待機を命じて、歩兵一中隊余から成る特別部隊でもってニコライ駅を占拠した。<sup>(5)</sup>

七日にモスクワ守備隊に配置されていたのは九歩兵連隊（ロストフ、キエフ、タヴリダ、アストラハン等の連隊）、第三スモスキー竜騎兵連隊、第一ドン・カザーク連隊と第三四カザーク連隊の四騎兵中隊、二工兵大隊、二擲弾兵大砲旅団とロストフ及びネスヴィージ両連隊に付属した三機関銃中隊であった。<sup>(6)</sup> 兵員総数については明確には特定しえない。動員解除に伴ない歩兵連隊は通常の三分の一の約五〇〇〜六〇〇人程度であったといわれる。しかも守備隊当局は兵士の反乱から歩兵連隊に信をおけずにおり、当局が鎮圧に動員しうるとみたのは二〇〇〇名程であった。<sup>(7)</sup> 従って、当局はスト開始とともに、鎮圧軍の補充を試みるころとなり、早速にロストフ市から砲兵がモスクワ

へ差し向けられたが、道中、動揺が認められたため、カザークの厳しい監視の下におかれた<sup>(8)</sup>。明らかに当局はここでも結果的には相手の力量を過大評価することになる、いわゆる最悪事態主義の立場をとっていて、この後も、絶えず鎮圧軍の補強を志向することになる。

この夜、「情報ビューロー」は会合して、そこで社会民主党系の側がエスエル側に軍事専門家の存否をたずねた。ヴァシーリエフ・ユージンによれば、エスエルのルドネフもゼンジーノフも彼らの軍事関係情報を述べる事が出来ず、またそうしたくない様子であった。ここでの軍事専門家の存否をめぐるやり取りは蜂起指導部の準備の悪さを示していた<sup>(9)</sup>。遅れて「同盟」のペレヴェルゼフが駆け付け、ニコライ線を除き全てが停ったと報告した<sup>(10)</sup>。

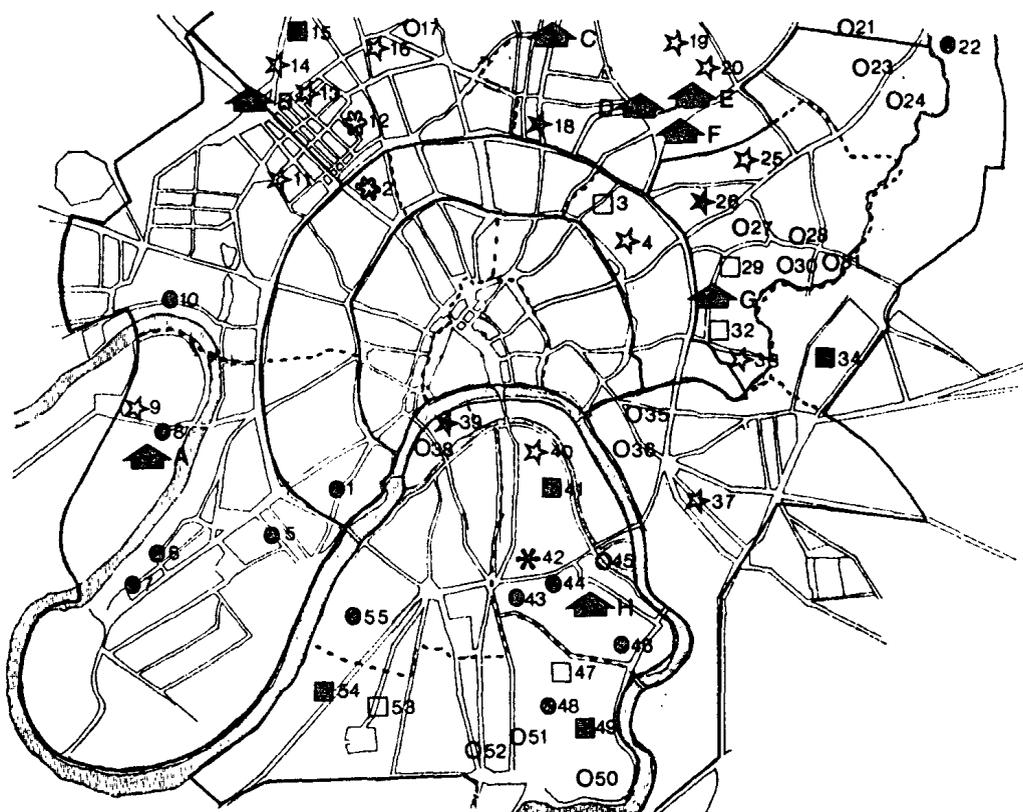
この日、午後二時、十一月二四日にモスクワ総督に任命され、この四日に着任したばかりの中將ドゥバースォフはモスクワ市に非常事態宣言を出し、さらに深夜におよんで、連合ソヴェトの主要活動家を逮捕した（「同盟」ペレヴェルゼフはそれを免れる<sup>(11)</sup>）。

夜には劇場も閉じられ、メイン・ストリートのとヴェーリ通り（現在のゴーリキー通り）の街灯は消えて警官の姿もなく、不気味な静寂が町を覆った。未明三時、バリシャヤ・ルビヤンカの武器店「ビトコフ」を一〇人程の一団が襲撃して、ピストル二五丁を略奪した<sup>(12)</sup>。

明けた八日、ストは益々拡大し、群集が官営施設従業員を「はぎ取り」、県出納局、各種裁判所は閉鎖された<sup>(13)</sup>。私立銀行の全てと商店の大半も閉じ、女子学校は一月一五日まで、男子学校は一月二二日まで閉校となり、全市がその機能を停止し出した<sup>(14)</sup>。

工場ストも大きく拡がりを見せたが、どこでも大概次の様子が観察された。つまり、朝に工場集会をやり、様々な政治問題を検討し、同時に可能な所では刀剣などの武器を準備し、集会終了後、自己の地区を歌と赤旗とともにデモ

1905年モスクワ市主要工場・鉄道駅配置図



KEY TO THE FACTORIES

- |  |  |   |   |
|--|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <i>Metal Factories</i></li> <li>Belgian Electric 15</li> <li>Bromlei 54</li> <li>Dobrov &amp; Nabgol'ts 41</li> <li>Gakental' 32</li> <li>Gopper 47</li> <li>Guzhon 34</li> <li>Lipgart 3</li> <li>Tereshchenko 53</li> <li>Veikhel't 29</li> <li>Zhako 49</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● <i>Textile Factories</i></li> <li>Alekseev, Vishniakov ribbon 36</li> <li>Anonymous silk 17</li> <li>Bundshukh dyeing 21</li> <li>Butikov mixed weaving 1</li> <li>Demin knitting 30</li> <li>Diufurmantev wool 28</li> <li>Dobrzhalovskaia canvas 8</li> <li>Fletcher canvas 51</li> <li>Gandshin &amp; Virts ribbon 45</li> <li>Giubner cotton 6</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>★ <i>Food Factories</i></li> <li>Abrikosov candy 19</li> <li>Bostandzhoglo tobacco 26</li> <li>Dukat tobacco 11</li> <li>Einem candy 39</li> <li>Gabai tobacco 14</li> <li>Genner sugar 9</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ <i>Railroad Stations</i></li> <li>Brest B</li> <li>Briansk A</li> <li>Iaroslavl E</li> <li>Kazan F</li> <li>Kursk and Nizhnyi Novgorod G</li> <li>Nikolaevskii D</li> <li>Saratov H</li> <li>Windau C</li> </ul> |
|--|--|---|---|

〔典拠〕 L. Engelstein, Moscow, 1905, Stanford U. P., 1982, p. 48.

〔注〕 工場の白印は労働者500-1000人, 黒印は同1000人以上。

し、商店・酒店を閉鎖して工場へ戻るパターンである。<sup>(15)</sup>

そして、労働者とカザークの衝突が発生した。例えば、正午、ダニエロフ・マニユファクチャ工場労働者がデモから戻ったところをカザーク・竜騎兵が襲撃して、負傷者十数名を出した。午後四時、ツインデリ工場労働者はその工場集会で工場側へ「全人民的な事業のための戦士」の解雇禁止、食糧支給を要求したあとギヴァルトフ発酵工場を「はぎ取る」ため代表八名を派遣したが、彼らはカザークにおそわれた。<sup>(16)</sup>

工場集会和並んで、地区集会和一般市民も参加する集会和各地で始まった。例えば、ハモフニキ地区の集会には二〇工場から七八代表者が出席し、ソヴェト執行委の決定を検討したが、これは地区ソヴェト集会の一つとみてよいであろう。<sup>(17)</sup> 市民集会は、例えば「一般技術教育博物館（Политехнический музей）」で終日幾つものそれがなされ、

そこで政府官吏、国立銀行従業員、税関吏たちも独自の会合をもった。<sup>(18)</sup> 夜には劇場「水族館（Аквариум）」で三〇〇〇人規模の大集会がなされたが、これには初めて本格的な軍隊の出動がなされ、一時劇場は包囲された。しかし、ほとんどの者は隣接したコミサロフ技術学校等へ無事に脱出した。これらの集会は等しく革命党派の煽動の場でもあり、「勝利か死か」の言葉が飛び交い、「土地と自由」と染め抜かれた赤旗が振られる熱気につつまれていった。<sup>(19)</sup>

この日、ソヴェト執行委員会は、地区ソヴェトを強化し、毎日召集せよ、工場集会をやり、蜂起にそなえよ、兵士と対話して公然たる衝突を避けよ、と指令を出した。<sup>(20)</sup> この指令から、はじまったストを武装蜂起に転化したいソヴェトの意欲はみてとれる。

鉄道では前日、兵士により占拠されたニコライ線が運行を続けていた。後にみるように、蜂起を最終的に鎮圧すべく、ペテルブルクからセミョーノフ連隊が同線経由でモスクワ入りするから、後の研究者が同線の動向に注目するのはけだし当然である。しかし、この点で一部の論者がなすような、ニコライ線は特にエスエルの影響が強かった↓ニ

コライ線を停止しえなかったから、蜂起は失敗した↓故に、蜂起敗北の責任はエスエルにある、といった議論には筆者は組しない。実際のところ、セミヨーノフ連隊の鎮圧活動以前に蜂起の帰趨は決していたし、たとえエスエルがニコライ線を止められなかったとしても、彼らこそが蜂起時に鉄道ストでそれを上回る活躍をしたのである。ニコライ線をめぐる問題は別の所にその解答を求める必要がある、この点で筆者の知る限り、エンゲルスタインのみが説得的な追究をしている。彼によれば、同線労働者の多くはモスクワに定住しておらず、その主たる現場はペテルブルクにあり、また、ほとんどの同線機関士はペテルブルクかトヴェーリに住んでいて、同線関係者はモスクワから見ればいわばアウトサイダーであったのである。<sup>(21)</sup>このことが兵士による占拠とならんで、同線のスト入りを強く阻害した要因であったと思える。

この日、ブレスト線の作業場集会(三〇〇人)には帰還したばかりの満州派遣兵士も出席したが、彼らは帰郷のためであろう、さらに各地へ行く列車の運行を求めた。<sup>(22)</sup>

おそらく右のソヴェト指令も力あって、兵士と大衆との対話が観察された。トヴェーリ通りのストラストナヤ広場(現在のプーシキン広場)での集会に來た兵士たち(半中隊)は「ナロードは射たない」と語った。ここに遅れてきたカザークを群集が取り巻き、ある若者が人民の側につくように言うのと、カザークは「俺たちは国家を守ろうとしている」と答えた。これに対し、群集は「我々自身が国家でもあるのだ」と切り返した。<sup>(23)</sup>

このようなやり取りは市内各地でおそらく幾つもあったであろう。少なくともこのスト突入期には、兵士は人民大衆を射撃していない。彼らは複雑な立場と気持ちにあって、特に歩兵の一般住民への「やさしさ」が目立ったといわれる。<sup>(24)</sup>

ソヴェトの『イズヴェスチヤ』第二号(八日付)は、ペルノフスキー連隊の擲弾兵が強く高揚している。他の歩兵

連隊も同様で、彼らは労働者を射たないであろう。クレムリ兵營は昨日、兵士集会をやり、要求を当局へ提出した。集会はストに共感している。カザークと竜騎兵のみが狂暴だ、と書いて、兵士との連帯条件が形成されつつあることを強調した。

このようにストは順調に開始されたかに見えたが、先月から先行していた郵便・電信ストはこの日に全く退潮し、中央郵便局は就業し出した。<sup>(25)</sup>そして、運動の展開にとり重大な意味をもったペテルブルクでのストは、この八日に開始されたが、モスクワ程の拡大を見せず、ペテルブルク鉄道管理局は動き、全てのターミナル駅は占拠した軍隊であふれており、十日にはストが下火になってしまふ。<sup>(26)</sup>

(二) 本格的闘争期（一二月九—一一日）

右に見た八日夜の劇場「水族館」大集会を竜騎兵を中心とする軍隊が包囲したことから、大衆は一種のパニック状態に陥り、そこからかろうじて脱出した者は昂ぶった神経のまま夜を明かした。兵士の人民側への移行を期待し、現に兵士の対応はおだやかであったために、一方で鎮圧者としての軍隊兵士の出現は一樣に人々を慌てさせたと思える。運動指導部はデモの集会への切り替え、兵士との衝突回避を改めて指示し、集会は労働者武装部隊に防衛され行なわれるところとなった。かくして、労働者武装部隊の系統的な活動が開始された。

ここでいう労働者武装部隊（*боевая дружина, дружина* 以下、単に「部隊」とする）はモスクワ武装蜂起を一翼で担った特徴的主体として明記されるべきものである。

「部隊」は一九〇五年九月スト時に印刷労働者間に発生して、用語及び実態の確立を得たとされるのが通例である。<sup>(27)</sup>十月ゼネスト期のモスクワ大学包囲戦時に、学生間に『大学「部隊」』と『カフカース「部隊」』が存在したこと

はよく知られる<sup>(28)</sup>。後者は同地方出身学生が構成したものである<sup>(29)</sup>。それらはいわゆる黒百人組から集会を防衛した。十月二〇日のパウマン葬儀には数百名の「部隊」が葬列の防御に登場しているが、この後、自由業者・学生たちインテリらの「部隊」は合流して、『自由地区「部隊」*вольная районная дружина*』を結成し、さらにいわゆる『守勢「部隊」*пассивная дружина*』が自発的な住民組織として出現した<sup>(30)</sup>。この一二月蜂起では地区住民により「自衛特別委員会 *особая комитет самообороны*」が登場し、泥棒や強盗に対抗したとされるが、これなどは『守勢「部隊」』の一バリエーションであると考えられる。これらの他、鉄道員、党派も各々独自の「部隊」を有した。従って、この蜂起以前に反権力側に若干の軍事力を有する集団が存在していたことは確かだ、十月末には革命三党派、学生、インテリらの「部隊」を結集して『「部隊」長連立ソヴェト *коалиционный совет начальников дружин*』が形成された。その主任務は大衆的ポグロムに対し防衛を図ることであった<sup>(32)</sup>。

蜂起段階では各地区毎に「部隊」が配置されていて、部分的には独自のパルチザンの行動をなすところが出てきていた<sup>(33)</sup>。一二月九日夜の「部隊」長連立ソヴェト会議では、「部隊」活動に系統性をもたせるために「情報ビューロー」をつくり、それが人民大衆に蜂起準備を説明すべきだとの意見が出たが、実現しないままとなった<sup>(34)</sup>。従って、蜂起時の「部隊」はそれを統括する特別な軍事的中心を持たずにいたとみられる。

さて、九日の夕方、トヴェーリ通りのストラストナヤ広場での大衆集会（三〇〇〜四〇〇人）を竜騎兵が包囲した。群集は口々にこちらへつけ、と叫んだが、一旦姿を消した竜騎兵は増員されて再び出現し、逮捕活動にかかった。人々は逃げまどい、約五〇人が同広場奥の市電停車屋へ避難したが、そこを攻撃され、コミサロフ技術学校生徒一名が死亡し、停車屋は燃上した。襲撃を受けた群集はとまどい、いわば本能的に身を守るためのバリケードを熱狂的に構築し出した。さらに彼らは通りを北上して凱旋門広場（トヴェーリ通りと環状道路〔サドーヴァヤ〕の交差点）

に至り、そこで電信柱を切り倒してバリケードをつくった<sup>(35)</sup>。これらがこの蜂起時で最初のバリケードであると思える。この場合、バリケード構築は極めて自然発生的になされており、いかなる組織的な指示もそこに認めることはむづかしい。

バリケード構築は街頭闘争を導き出すことになるが、一方ではこの日にそれが組織的になされたことも事実で、例えば、夜十時、凱旋門に一五〇人程がやってきて秩序立った構築を行った。見よう見まねで構築をやる一般住民の所へ「部隊」がきて、それを指導すると全体に共感が発生し、住民たちが「部隊」を支援する光景が観察された<sup>(36)</sup>。

このようにして市中心部で街頭行動は開始されたが、バリケードの拡張は物理的に地区間の連絡を切断し、全市ソヴェトの機能を低下させ、逆に地区ソヴェトを活性化させることになる。この九日は各地区ソヴェトの集会が行なわれ、市周縁部には中心部とは全く異なる風景があった。プレスニャルハモフニキ地区ソヴェト集会では、一六工場が高揚し、六工場は平常通りであるとの報告に続いて、ルイバコフ工場では、多くの労働者が農村へ戻っているといわれた<sup>(37)</sup>。この労働者の帰村問題は時間の経過とともに大衆的様相を呈し、蜂起時の顕著な労働者行動様式となるが、運動の初期段階にすでにそれが出現していたことに注目しておこう。ザモスクヴォレーチエ、ブトウイルスキー、ゴラドスコイの各地区ソヴェトもこの日に集会をし、ザモスクヴォレーチエでは次の決定をみた。①ソヴェト執行委に工場主に対し工場から軍隊を遠ざけるよう依頼させる ②黒百人組的喫茶店の閉鎖 ③モスクワ市会にその全権解除とその全資本のソヴェトへの引渡しを要求 ④必要ある場合、巨大食料店を奪略 ⑤全ての集会は逮捕者釈放を要求のこと<sup>(38)</sup>。

九日のソヴェト執行委員会は銀行からの預金引出し促進とパン屋が黒パンのみを焼くことの認可等をして、格別に戦闘戦術問題を議論してはいないが、メンシェヴィキたちは大衆の気分をいかに維持するかを検討した。そこでは、

地区諸組織がストや集会のみでは労働者は満足しない。ストを減退させぬために何らかの大衆行動が必要であるとの報告がなされた。兵士を「取り外す (срёмка)」ためにスト組織が言われるが、それは兵士との関係が許すところのみで、他では地区ごとのデモをやることになった。<sup>(40)</sup>

公然と姿を現わした「部隊」とバリケードが反乱側の主たる道具立てとなったが、彼らは闘争の本格化にあたり、九日夜、手痛い打撃を蒙った。ロブコフスキーとムイリニコフの両横丁角にある「フィードレル名称カルヴァン派教会実科学校」で行なわれた「部隊」員と鉄道員らの集会を竜騎兵と警官の一隊が急襲したのである。校長フィードレルは革命運動に共感し、同校がモスクワの革命派の代表的アジトであることを当局は知っていた。集会していた「部隊」員を逮捕し、武装解除せよとの命令を受けた一隊は抵抗に会って激しい戦闘となり、革命派は爆弾を投じたが、結局、双方あわせて数名の死者と二〇名前後の負傷者が出て、同校は制圧された。後の同事件起訴状によれば、逮捕者一一五人程で、そのうち学生・生徒三六人、鉄道員二三人（モスクワカザン線一七人）であった。<sup>(41)</sup> 別の資料によれば、「部隊」員二〇〇人と鉄道労働者七〇人が逮捕された。<sup>(42)</sup> 警察側は逮捕した「部隊」員をエスエル系と認定した。<sup>(43)</sup>

そして、この会戦を契機に、政府側は軍事的鎮圧のみにたよることとなった。総督ドゥバースフは同夜半におよんで、軍事力で各個打破を図る極端な弾圧策の採用を決心し、さらに「ロシア人同盟 Союз русских людей」のシチエルバートフ公爵の提言を容れて、警察に従属する独自の民警を組織することにした。<sup>(44)</sup> この民警こそが革命派が嫌悪をもってよんだ黒百人組の実態である。

ドゥバースフが弾圧の主力とすべき兵士たちは動揺を続けていた。例えば、ノヴィンスキー・ブリバールに出勤したカザーク五〇〇人は指揮官から人民への発砲を命ぜられたが、射たずに後退して、群集は歓呼の声を上げた。また

カザークがクードリンスカヤ広場で竜騎兵と衝突したと伝えられた<sup>(45)</sup>。『イズヴェスチヤ』第三号はアレクサンドロフ兵営から歩兵連隊がマルセーエーズを歌いながら、ツィンデリ工場へ向ったと報じた。

鉄道では、リヤザン・ウラル鉄道が停止した。これはパヴェレツカヤ駅の鉄道労働者がついにリベラルを含んだ同線の組織ビュローを否認した結果であり、この蜂起の特徴の一つとなる、十月に積極的であったリベラル・中間層の運動不参加にはずみをつけることとなった。

十日朝からトヴェーリ通りの総督の館（現在、モスクワ市ソヴェト）を警備して、カザーク、竜騎兵、警官が立ち並び、トヴェーリ・ブリバール一帯を警官隊が往来した。権力側は態勢を整え、同ブリバールから内側の市中心部（ツェントル）から反乱者を排除する方針が明確になった。正午にその動きが出た。トヴェーリ通り中央にいた竜騎兵が同通りと周辺横丁から人々を追いたて、ストラストナヤ広場とガゼトヌイ横丁（現在、オガリョーフ通り）の間の同通りを軍隊が完全に制圧した。ストラストヌイ修道院に竜騎兵中隊が陣取り、その十字路とトヴェーリ通り側に入った巨大な群集と対峙したが、中隊の威嚇発砲で人並は大きく崩れ、そこを竜騎兵が攻撃して死傷者が出た。ブロンナヤ方向から駆け付けた「部隊」が応戦に努めた。かくして本格的な戦闘が開始された。最初の主戦場となったのはストラストナヤ広場からトヴェーリ通りを北上して凱旋門までの区間であり、権力側は大砲、機関銃を登場させて一斉射撃をした<sup>(47)</sup>。

これに対し、民衆側は熱狂的なバリケード構築で対応した。凱旋門広場では数千人の周辺住民が老若男女総動員の形でそれに参加した。中には兵士がその構築に加わる姿もみられた<sup>(48)</sup>。

他方、周縁部工場諸地区では集会が続いていた。ツィンデリ工場は数千人規模の大集会となり、政治的権利をうるために蜂起の必要問題が語られ、軍隊の支持がその成功の鍵になるとされた。ここでの雰囲気はすでに「蜂起」が始

まっていた市中心部とは異なっている。タガンカ広場の二〇〇人集会では商人の姿が目立った。ここで唯一の政治的スローガンは憲法制定会議召集で、集会参加者はタガンカ監獄へ農民大会代議員などの政治犯解放に向って、阻止された。また、ヴヴェジュンスカヤ広場での八〇〇〜九〇〇人集会では、トヴェーリ通りのバリケードに来たロストフ連隊の一中隊がカザーク分隊に対して一斉射撃を加えて、退却させたという報告がなされ、参加者全員に強い印象を与えた。<sup>(49)</sup>

昼にはギユブネル工場とその隣接工場の労働者たち数千人がハモフニキ兵営へ巨大なデモをかけた。<sup>(50)</sup>これは、翌一日に群集がスパスク兵営のロストフ連隊「はぎ取り」をめざした動き<sup>(51)</sup>とならんで、蜂起過程で見られた数少ない兵士に対するアピール行動であったが、途中、竜騎兵の阻止にあって失敗した。

このような事態の急激な展開は運動指導部を慌てさせた。この日の、最後となった「部隊」長連立ソヴェト会議ではメンシェヴィキとエスエルが積極的行動を主張したが、ポリシエヴィキは大衆と組織双方の準備の悪さを理由にそれに慎重であったといわれる。<sup>(52)</sup>ソヴェト執行委は地区組織との接触を失ない、ほとんどを連合ソヴェトに依存する形となり、それが十日夜に次の決定をなした——ソヴェト執行委と大衆との結合確保が困難なため、大衆闘争の直接的指導は地区ソヴェトに属すべきこと、バリケードを構築のこと、兵士を「はぎ取る」<sup>(53)</sup>ため、兵営へデモ行進のこと。

この決定は蜂起の運動形態を初めて具体的に示しているが、バリケード構築にしる、兵営へのデモにしる、既に見たように、これらはすでに民衆が実施しており、この点で指導部は全く立ち遅れていて、むしろ人民大衆の運動自体が先行していたのであり、そしてソヴェト執行委はその役割を地区ソヴェトへ譲ずることで、自らこのことを認めた形となった。蜂起はそのエネルギーを束ね、統括すべき部分の機能不全から、専ら地区単位の人民運動の動向にその

運命を託すことになった。

事態の急転回に狼狽したのは権力側として同様であった。一二月二〇日付のモスクワ守備隊当局の陸相宛て報告書は、この十日について、こう記述している——運動はさらに危険性を孕んだ。バリケードが凱旋門につくられ、それによって環状道路全てを把握し、市中心部（ツェントル）と軍隊のいる周縁部を切断しようとする動きが出たため、一部を兵營に残置した上で、軍隊全てを市中心部へ集中することにした。<sup>(54)</sup>

実際にこの日、兵營を引き出された兵士集団は、主力を二隊に分けられて、劇場広場（現在、ボリシヨイ劇場前のマルクス広場）と馬場（マネージ。現在、クレムリン脇の展覽会場）に集中され、残りは駅と幾つかの公共施設に張りつけられた。しかし、すでに我々が知るように、順序は逆である。市中心部を軍事力で封殺された蜂起側が凱旋門に踏みとどまり、バリケードを構築したのを当局は報告書にいう切断志向と理解したまでのことである。

だが、ここで起きたことは重大な意味をもった。つまり、蜂起側が期待した兵士集団が最も手の届かぬ市中心部に封じ込められたからである。さらに、権力側が信頼するに足りぬ部分は兵營に閉じこめられ、全体として、蜂起側と兵士の接触が著しく困難になった。

一二月一日が戦闘のピークになった。蜂起側はバリケード構築を進め、鎮圧側は軍隊の占拠地域を拡大して、両者は環状道路の北部から西部一帯を中心に激突を繰り返した。一斉射撃をおそれ、外出もままならぬこともあって、大衆集会はみられない。

バリケードは面の拡大をみせて、環状道路をクードリンスカヤ広場からツヴェトヌイ・ブリバールまでを覆い、更にアルバート、マラーヤ・ブロンナヤの各通りなどを捉えた。<sup>(55)</sup>一方、鎮圧側も確実に拠点を確保しつつ、劇場広場に集結した兵士を使ってバリケードの解体にかかり、<sup>(56)</sup>パルチザン戦術を全面的に採用し出した<sup>(57)</sup>「部隊」と衝突したが、

特に激戦がみられたのは、カレートナヤ環状道路、クラースナヤ関門、ブトゥイルスカヤ中継監獄の三地点においてであった。<sup>(58)</sup>

蜂起側は戦闘手段に決定的に欠けており、「部隊」は、挽き切った電信柱に一ルーブル五〇カペイカを、バリケードにブリバールの石を持ち込めば五〇カペイカを各々支払い、ブローニング銃が一丁一七ルーブリから四五ルーブリに値上りした、といった話がまことしやかに流れた。<sup>(59)</sup>

この戦闘のピーク時に、一方で、労働者が益々農村へと去り始めた。幾つかの工場で労働者の農村への逃避が目立つようになり、<sup>(60)</sup>モスクワ市に踏みとどまり蜂起に参加する者との区別（蜂起参加者のエリート化）が進行した。

さて、ここで市中心部における事態の進展を一旦停止して、鉄道に目を転じてみたい。

鉄道員たちは独自の「部隊」を組織した。その数はモスクワ鉄道管理局全体で約五百人規模と推定され、各路線毎に結成された「部隊」の中で最大級はモスクワカザン線のそれで、<sup>(61)</sup>ほぼ二百人と思える。鉄道員の「部隊」も当初はやはり駅とスト破りとに対する防衛を使命としたが、闘争の激化につれて蜂起に積極的関与を果し出した。

鉄道員「部隊」指導部には「同盟」中央ビュローから機関士A・ウフトムスキー、同B・タタリンスキー、そしてポリシェヴィキの会計係D・M・コトリャレンコが入ったが、<sup>(62)</sup>彼らは直接的にはカザン線「部隊」を指揮して、「カザン線ソヴェト」を構成した。

極東で動員解除された兵士を乗せた帰還列車のほとんどがこのカザン線経由でモスクワ入りするために、蜂起側はこの路線に最も注目して、すでに見たように、その軍隊列車の運行を図り、まずは兵士との衝突を回避しようとした。そして、出来ることならば、十月の時のように、これら兵士を革命側へ引き入れることを望んだが、当局により動員解除兵士の一部でモスクワ守備隊を補充する動きが出たため、事態は緊張し、複雑になった。「部隊」側は、政

府軍の補強阻止と武器獲得のために、市郊外のペロヴォ駅とリュベルツイ駅にチュック・ポイントをもうけ、そこで帰還列車を止め、ピストルやライフル銃を奪取し、帰還兵士らに「人民の事業」への参加を呼びかけた。<sup>(63)</sup>ペロヴォ駅での帰還兵士とのそうした出会いを描写した一資料によれば、同駅で集会をやり、兵士らにストの目的を知らせると彼らの気分は落着き、二人の水兵と一兵士が「部隊」に参加を申し出たが、ほとんどの兵士はなるべく速くモスクワへ行きたがった。列車に武器・弾薬があることが判明し、兵士にその引き渡しを求めると、彼らは士官に頼めと答え、何人かはその運搬に協力した。<sup>(64)</sup>

カザン線「部隊」は同線モスクワワルファウストヴォ間の主要駅で憲兵、警官の武装解除をやり、そこに「人民権 Народное право」を自己の権力として樹立し、周辺の工場労働者、さらには農民を加えた独自の「部隊」を駅毎に組織した。これらの「部隊」は鉄道財産（貨物等）の防衛をしたが、注目される現象として連日「部隊」列車が同上区間に運行されたことで、それは昼間にモスクワで闘う者を救出、支援し、夜間に戻ることを繰り返した。十月ゼネスト時は鉄道網は完全に停止したが、この場合はその一部が革命のために動員されたのである。その規模は小さかったと推定されるが、モスクワ蜂起の横への（郊外への）拡がりを示すものとしてこの事実はとらえられる。<sup>(65)</sup>

このようにカザン線における「部隊」列車の運行は一定、モスクワ郊外を革命化したと思えるが、蜂起時に別の地域、特にヤロスラヴリ線沿線でもモスクワ市の動きに呼応する労働者の運動があった。例えば、ムイティシチーの車輛工場（二五〇〇人）からは一部の労働者がモスクワへ出て戦闘に参加し、同線のモスクワ駅とムイティシチー及びプーシキノ駅の間にはやはり「部隊」列車が運行された。<sup>(66)</sup>

さて、モスクワ市内における鉄道員の主たる軍事行動はヤロスラヴリ、カザン、ニコライ三線のターミナルが並ぶカラチエフスカヤ広場（現在のコムソモールスカヤ広場）に集中した。既述の通り、ニコライ駅は政府軍により厳し

く占拠されており、八日、九日、「同盟」でその奪還が検討されたが、同線労働者に期待出来ず、それは鉄道員「部隊」と人民大衆にまかされた<sup>(67)</sup>。結果的に鉄道員「部隊」が活動したのはこのニコライ駅をめぐる攻防戦のみであり、それ以外に市中で何をなすべきか、計画の提示はなかった<sup>(68)</sup>。

一二月一〇日からその攻防戦は開始され、同広場で数次に渡る交戦が一五日まで断続した。特に一二日はペロヴォ駅から三百人の「部隊」列車が着き、カザン線の蒸気機関車庫に結集した二〇〇〇人とともに、ヤロスラヴリ線駅の作業場に陣取った者たちと呼応して、ニコライ駅への攻撃を図った。しかし、一五日早朝、政府軍の砲撃で蜂起側は鎮圧された<sup>(69)</sup>。

カラチエフスカヤ広場が市中心部の主戦場から離れていたことも鉄道労働者の戦闘を孤立させることになった。鉄道員「部隊」で唯一、例外的に主戦場にあったのが、プレスニャ地区のプレスト線「部隊」であった。

### (三) 闘争後退期（一二月二一—一六日）

ニコライ駅をめぐる戦闘がピークをむかえた一二日、バリケード地帯は一見平穏に明け、幾つかの商店が開き、人々は買い物に出た。このことはバリケードに囲まれた区画が安定して存在を始めたことを示すが、正午頃から銃声が響き出すと商店は慌てて閉じられた。政府軍は「部隊」のアジトと推定した家屋への襲撃を試みて、交戦が繰り返された。

この日、総督ドゥバースフは内相ドゥルノヴォーにこう伝えた——状況は大変に深刻であり、バリケードの環がますますきつく町をとらえている。対抗すべき軍隊は明らかに不足しており、ペテルブルクから、たとえ一時たりとも歩兵旅団を派遣されることが極めて必要である<sup>(70)</sup>。

蜂起側はミウツスカヤ広場の市電車庫に労働者二〇〇〇人程でバリケードを築き、同広場にある「工業学校」を上級生約百人で占拠した<sup>(71)</sup>。さらにこの日、ロゴシユカヤ関門に鉄道橋からヴラジミール街道を横切って、貨車七輛でバリケードがつくられた<sup>(72)</sup>。これに対し、政府軍はバリケードを一掃し、兵営との自由な交通を回復させるために、プレステンカ、ポヴァールスカヤ、トヴェーリ、ミヤスニツカヤ、ポクロフカの五通りへ派遣軍を繰り出した。このうち、ポヴァールスカヤ通りへ向った一隊がクードリンスカヤ広場で強固なバリケードに遭遇して、苦戦を最も強いられた<sup>(73)</sup>。同広場の背後はプレスニヤ地区である。

街頭での交戦が続く中、警官は通りから姿を消すか、反乱者の襲撃をおそれて平服を着用していた<sup>(74)</sup>が、その一方で、一二日からはドゥバーソフの民警が公然と登場してきた<sup>(75)</sup>。

一二日からセミヨーノフ連隊らによるプレスニヤ鎮圧が始まる一七日までは、町の外観はさほど変わらず、バリケードの解体とその復旧が繰り返えされる「相対的安定」期であったが、蜂起側はその間に確実に疲労し、後退して行く。

一三日、政府軍は環状道路のスハリョーヴァヤ塔からカレートヌイ・リヤートまでのバリケードを撤去し、蜂起側の「解放区」は西側、プレスニヤ方向へ縮小を始めた。攻防戦の拠点は市中心部からプレスニヤ地区へのいわば正面入口にあたるクードリンスカヤ広場に移り出した<sup>(76)</sup>。

しかし、鎮圧側は一挙にそこを確保する軍事力を明らかに欠いていた。この日、総督は夜九時以降の外出禁止令を出し、さらに夕六時以降全ての通行者はチェックされ、通りに三人以上集まっていると兵士ないし警官に発砲されると警告した<sup>(77)</sup>。彼は同時にペテルブルクに対し、守備隊一万五〇〇〇人のうち、使えるのは五〇〇〇人に過ぎないと軍隊増派を改めて願った。これに対する返事は、ペテルブルク守備隊の一部は沿バルト地方に派遣しており、残留の

一部は期待出来ず、期待出来る部分は当方で真に必要であるとしたものであったため、ドゥバーソフは直接、ツァールスコエ・セローへ電話した結果、セミョーノフ連隊のモスクワ派遣が決まった<sup>(78)</sup>。

一四日、ミウツスカヤ広場の蜂起派は砲兵による砲撃をうけ、政府軍は革命派戦闘組織の中核が集中しているとみられたブロンナヤ通りに攻撃を集中した<sup>(79)</sup>。明らかにこの日から蜂起側の士気は低下し出した。例えば、ツィンデリ工場労働者がストに不満を言い出し、ジロー工場ではアンチ・キリストの到来が言われて、労働者間にパニックが目立ち、その一部は帰村した。復活祭までストはやれない、一両日中に就業しなくてはという話が労働者間で出るようになった<sup>(80)</sup>。大衆の気分から言えば、どうやらこの日が様々に限界で、転換点であった。

この夜、メンシェヴィキたちは、兵士が人民側に移行するのは大衆の高揚がある場合のみであるが、それが低下した故、もはや勝利はありえないとの判断に達した<sup>(81)</sup>。

一五日までに勢力関係は大きく変化し、均衡は崩れ去った。「部隊」は疲労し、それが数的に少ないことが判明して、人民大衆の気分は急速にしばみ出した。「部隊」のために、平和な住民が銃殺されていると思う者も出てきて、革命家の要求は憲法ではなく、アナキーだ、と言われ出した<sup>(82)</sup>。『世評 МОЛБА』紙記者は、今日（一五日）、状況が急変した。幾つかの通りで店は開き、交通が少し戻ってきた。幾つかの銀行が午前中営業した、と書いた<sup>(83)</sup>。通りを駆者が走り、パン屋が白パンを売り、各工場で個別的にグループが就業し、そして工場労働者の農村への一斉逃亡（*повальное бегство в деревню*）が出現した<sup>(84)</sup>。この夜、何人かの「部隊」長は自己の隊員を「除隊」し、解放した。「部隊」の自発的な解体である。そして「部隊」活動の弱体化に伴ない、各地に商店荒らしなどの無法者（フリガーン）が出没し出した<sup>(85)</sup>。

一五日、ツィンデリ工場食堂で第五回ソヴェト会議が開かれた。モスクワ・ソヴェト最後の会議である。代議員に

は欠席が目立ち、八〇人余りしか出席しない。各報告は労働者の士気低下を指摘するが、敢えて闘争中止を言い出す者はいない。前日、態度を決めていたメンシェヴィキ代表もその場の雰囲気には押されてか、それを主張せず、「同盟」とボリシェヴィキは闘争継続をいって、これが通るところとなった。<sup>(86)</sup>しかし、闘争継続といっても、具体的戦術の検討がなされた様子はない。

こうした革命派の退潮の後を追うようにして、右翼の活動が表面化してきた。この日、ソコリニキで大規模な愛国的示威行進が予定された。それはツァーリの肖像と教会旗を掲げた市中へのデモとなるはずであったが、当局は蜂起側の襲撃を警戒して、それを認めない。<sup>(87)</sup>

やはり一五日、エスエル党モスクワ委員会が逮捕された。<sup>(88)</sup>

このように蜂起側はその活動に大きな陰りをみせたが、一方で、鎮圧側はその手をゆるめない。蜂起側がバリケードを系統的に構築して、その環を徐々に中心へと縮めて、都市権力の掌握を凶っているとする認識を持ち続けた。<sup>(89)</sup>

そして、この日、ついに政府軍がプレスニャ地区に手をかけた。ズロフ大佐の一隊がクードリンスカヤ広場に入っ  
て、夜営したのだ。更に、セミョーノフ連隊がニコライ線経由でモスクワ入りした。<sup>(90)</sup>

一六日午後、十日ぶりに停電が回復し、市中心部のバリケードが撤去されて、交通が戻り、多くの工場地区も就業し出した。そうした中でクードリンスカヤ広場の一隊は周辺の家々からの激しい銃撃を浴びて、砲兵が行動を開始した。<sup>(91)</sup>

ソヴェト執行委員会とボリシェヴィキ・モスクワ委員会は、この一六日に、労働者たちがストを止めてしまったことを理由に、一九日にストを中止することを決定した。<sup>(92)</sup>「同盟」がその中止を決定するのは一七日である。<sup>(93)</sup>

一六日夜、ザモスクヴォレーチエのシャーボロフカの最後のバリケードがたおれ、「部隊」はプレスニャへと後退した。<sup>(94)</sup>人々はただプレスニャ地区のみが執拗に闘っているのを知っていた。我々はここで孤立することになったプレスニャでの闘争を検討しなくてはならない。

## 六 プレスニャにおける闘争

モスクワ市西部周縁に位置したプレスニャ地区はその南端部をモスクワ川に接した新開拓地であり、同市の工場地区の一つを構成していたが、労働者千人以上の工場は「トリョフゴールナヤ・プロホロフスカヤ綿工場」(以下、プロホロフ(工場)とする)のみで、最も発展が遅れていた地区の一つでもあった。

まず、プレスニャにおける闘争で中心に位置したプロホロフ労働者の相貌について若干触れておきたい。ここで、筆者が基本的に依拠するのは一九三一年刊の同工場労働者の回想集であるが、これは周知の工場史叢書で最も早いものとして出され、驚く程に率直な回想を幾つか収録している。その序文を書いた、これも良く知られるM・ロシコーヴァ<sup>(3)</sup>はプロホロフ労働者数が夏季に減少する事実を指摘して、彼らと土地(農村)とのつながりを言い、もう一つの序を書いたO・チャアダエヴァも工場宿舎は農村と大なり小なり堅固な現実的結合を保ち、農民と工場労働者(Фабричные рабочие)を区別しえないとしている。<sup>(5)</sup>

プロホロフ工場がエスエルの「巢窟」ないし「要塞」であったことはエスエル以外の同地区労働者や革命家により一致して指摘されているが、<sup>(6)</sup>エスエルは特に織布部門労働者に強固な支持基盤を有していた。<sup>(7)</sup>一方、社会民主党側は一九〇五年六月末にプレスニャ地区をメンシェヴィキが担当するという「勢力分割」をやったという指摘があり、<sup>(8)</sup>蜂

起時にポリシェヴィキ・モスクワ委員会の指令でプロホロフ工場に乗り込んだリトヴィン<sup>9</sup>セドイは、そこでは自分がおそらく初めてのポリシェヴィキであったろうと回想しているから、少なくとも蜂起以前ではポリシェヴィキの影響力は当該地区、特にプロホロフ工場では小さかったと推測してよからう。なお、ガルヴィはプレスニャでのメンシエヴィキの拠点としてブレスト線作業場（その労働者ヴィノグラードフを中心とするグループは「同盟」に加わらない決議をした）、マモントフ・ワニス工場（その労働者Π・エフィーモフを中心とする労働者グループ）を、またポリシェヴィキのそれとしてグラチェフ工場とシミット家具工場を各々あげている<sup>10</sup>。

では、プロホロフ工場労働者でエスエル系とみなされる者はどのような回想を残しているのか、幾人かに登場してもらおう。

①И・М・ククリョーフ（グサーロフ）はモスクワ県ブロンニツイ郡の無土地兵士の家に生まれ、織工としてオレホヴォ<sup>11</sup>ズエヴォのモロゾフ綿工場に入った後、一八九七年にプロホロフに転職した人物であるが、次のように回想している——習慣的にエスエル組織で働いたが、私には政党について真の理解はなかった。我々の所では社会民主党系は製版部門にいたが、その組織は弱かった。私はテロルを気に入っていた。人間というものは戦闘的だと思っており、当時、このことを悪いとは思わなかった。農民には共感的に対応しようと考えていた。彼らは飢えており、労働者は彼らより良い住らしをしていた<sup>11</sup>。

②В・С・モロゾフは一八七七年、ヴラジーミル県ユリエフポリスキー郡の農家に生まれたが、兄弟は工場へ出て、彼は牧夫として賃稼ぎし、一四才でオレホヴォのヴィクレーラ・モロゾフ綿工場に入り、更に織工としてプロホロフへ移った。彼はいう——当時（一九〇二—三年段階）、私は大半の労働者と同様に政党について全く理解していなかったが、我々の知識欲は巨大であった。勿論、我々労働者は理論家でなく、単に実践家<sup>11</sup>革命家であった。ストが

労働者階級の生活改善に有効だと言われれば、我々はそれに同意した。我々にはこれを社会民主党が言うのかエスエルが言うのか区別がつかなかった。(モロゾフはまず社会民主党と接触するが関係はすぐに切れ、次いでエスエルと関わってその『革命ロシア』を読んだ。) エスエルを知った時、様々な政党があることは分ったが、それら綱領の相違など私には理解出来ず、ただ革命を望んでいた。しかし、私はいつも農民の意義を高く評価し、同時にテロルに強くひかれていた。当時の労働者はその多くが強く農村と結びついていて、復活祭になるとモスクワに残る労働者は大変なもので、大半は農村へ行ってしまった。労働者は土地問題の解決に関心があり、エスエルが土地を耕す者にそれを直接渡すというのはアピールした。労働者たちはエスエルと社会民主党の対立が理解しえず、我々は団結を望んでいた。<sup>(12)</sup>

③ A・C・モロゾヴァ(ブイコーヴァ)は一八七七年、モスクワ県コロムナ郡の農民身分出身で、近隣村の織工で織工をしたのち、一九〇二年プロホロフに織工として入っている。彼女も復活祭だけでなく、夏の草刈り期に農村との往復をやっていたのであるが、こう回想する——一九〇五年、私はどの政党といったことは考えなかった。ポリシェヴィキの言葉を最初に聞いたのは一九一七年のことである。……一九〇五年には党派ということはなく、全ては一つのように、我々の所では「土地と自由 *ЗЕМЛЯ И ВОЛЯ*」であった。<sup>(13)</sup>

④ Д・Φ・バブキンは一八八四年、カルーガ県ジズドリンスキー郡に生まれ、プロホロフの工場学校に入学した。彼は一九〇四年初め、エスエルの学生二人と会い、彼らの集会に出た。その回想は——社会民主党のことは〔その〕後に知ったが、その綱領は私を満足させなかった。エスエルの綱領は労働者と農民の利益により近いと思われた。私はテロルに共感し、一九〇六年には自分<sup>(14)</sup>でそれに参加したいと望んだ。<sup>(14)</sup>

⑤ П・А・ディヤチコフは一八七三年、モスクワ県クリン郡の生まれで、一八九五年プロホロフに入った人で、エ

スエルにひかれた理由をこういう——彼らはより根気強く、さらに土地のために私は彼らが好きになった。つまり、当時私はまだ土地と結びついていたのだ。<sup>(15)</sup>

⑥ O・B・ドゥダーレフは一八七〇年、モスクワ県モジャイスク郡の紡績工場労働者を父に生まれ、自身一才で同工場に入ったが、一八八五年の「ズエヴォの反乱」<sup>(16)</sup>後、そこを解雇された。その後、スモレンスク県、モスクワ市郊外での労働を経由して、一八九二年に織工としてプロホロフに入った。そして、日曜学校に通い出して、社会民主党の二人と会い、共感したが、その後、モスクワ市内でより引かれるスエルと出会った<sup>(17)</sup>（この個所は興味深いが、具体的理由は示されていない）。

これら六人のスエルに共感したプロホロフ工場労働者について、さしあたりかなり共通して指摘出来るだろう点は、社会的出自がモスクワ近郊（周辺）の農村出身で、そことの関係を保っており、年少期から繊維工場労働に従事していて、すでに幾つかの争議をプロホロフ就職以前に経験していたこと、そして党派性の観念を確立させることなく（あるいはそれが出来ずに）、いわば感覚的にスエルにひかれていたことである。

彼らが、党派性観念の欠落を自身のスエル共感のいわば言い訳としていると考えられないこともないが、しかし同じプロホロフ労働者で社会民主党系であった人たちの回想をみれば、この種の欠落は普遍的な現象であったと考えられる。目にとまった三人の例を次に簡単に紹介しよう。

① B・И・イヴァーノフは一八七九年、モスクワ県セルプホフ市の町人身分の家に生まれた。同市トレチャコフ工場の製版師であった父親が一八八五年にプロホロフへ移ると、彼も同工場学校へ入ることになり、プロホロフでの労働者生活の第一歩を始めた。彼は一九〇三―四年にブレスト線鉄道員の社会民主党サークルに加わり、そこでスエルの綱領も知ったが、純粋なプロレタリアートとしての彼はそれに共感しなかったという。回想はさらに述べる——

我々のサークルは、後に分ったことだが、メンシェヴィキであったが、一九〇五年まで私はメンシェヴィキもボリシエヴィキも聞かず、ただ社会民主党の全般的知識しか持たず、両派の対立は我々に好ましくない印象を与えていた。<sup>(18)</sup>

② A・Φ・アキロフ（オシーポフ）は一八八二年、カルーガ県の農民身分出生で、カルーガ市の居酒屋で皿洗いをやり、一八九七年頃、プレスニャのマモントフ工場に入ったが、その寄宿舎は二五〇人程が雑居しており、有資格労働者はほとんどいず、大半はカルーガとスモレンスク両県の農村から来た者であった。一九〇〇年頃に、彼はプロホロフの捺染部門へ移った。同部門の労働者は全てが織布部門へ移りたがっていた〔理由の提示なし〕。しかし、その資格をとるには一ヶ月は無償で労働する必要があり、さらに（そのための）先生を発見しなくてはならなかった。こうした彼にとり、エスエルと社会民主党の綱領の差違を完全に区別することは出来ず、両方とも同じ様にみえた。<sup>(19)</sup>

③ C・Γ・マズールは一八七六年、チェルニゴフ県農民身分の鉄道転轍手を父として、モスクワ市に生まれたから、農村を知らない。父親が彼をプロホロフ工場学校へ入れ、卒業後同工場製版部に就職した。その回想は——エスエルに共感しなかったのは、私が純粋なプロレタリアートだったからだと思う。私はテロルに引きつけられなかった。私は当時（一九〇五年）、社会民主党に共感していたが、自分をメンシェヴィキかボリシエヴィキか言うことは出来ない。（そうした）フラクションについては聞いていたが、私はそれに意義を与えなかった。<sup>(20)</sup>

こうした簡単な検討から分かることは、もはや、改めて述べるまでもなく、後の時代の者がそれぞれに明らかになっている諸党派の運命に立脚して、議論を積み重ねることの危険性であろう。党派性のもつ意味合いが同時代の人々と我々とは自ら異なっている。更に言えば、こうした回想を残した人々はいわば活動家として革命的党派と接する機会をより多く持ちえた者たちであり、そうでない圧倒的多数の労働者たちにとり、党派性の問題は彼ら以上に不分明

なものとしてあったと思える。

以上を前置きにして、プレスニャにおける闘争の諸様相を明らかにしたい。

時期は特定しえないが、蜂起以前に（一月中旬か）、プロホロフでも全市ソヴェト代議員の選出がなされた。この問題に直接触れる証言として、プロホロフ労働者Г・А・カレーエフ(21)と同B・C・モロゾフ(22)のもの、蜂起関係者に対する起訴状(23)、そしてガルヴィの回想を総合すると、その選出をリードしたのはメンシェヴィキとエスエルであり、同工場の各作業場毎に代表を選出し、さらにその中から一三人（一二人説もあるが、一三人の名前をあげる起訴状を採用）をソヴェト代議員とする二段階選出がなされた。より詳しく言うと、この代議員選出はエスエルのマルトウイノフが直接提案した(25)。メンシェヴィキのガルヴィはこの辺をこう回想する——事態がソヴェトの選出まで行った時、我々（メンシェヴィキ）は「無学な田舎者 *серая деревенщина*」（プロホロフ労働者を意味する）の間での純粋に労働組合的な問題プロフェンクナーリイイにおける巨大な影響力を行使して、同時に「工場委員会 *фабричная комиссия*」も選出することを決めた。そうすることで「工場憲法 *фабричная конституция*」の根本をおこうとした。影響力がある同工場労働者の小集会で、我々は工場代議員に関する規約をモスクワの印刷工労組が作成したものを参考にしてつくった。それは労働者民主主義の精神で貫かれていた。工場大食堂に三〇〇〇人が集まり、私はまずソヴェトの革命的役割から話した。モスクワではソヴェトの創出がおさえられてきた。全市及び地区ソヴェトをつくらう、と。次いで、工場では経営者の専制を「工場憲法」で取り替えるべきだといった。その機関が「工場委員会」だ。これに対して、労働者は逐一賛成した。エスエルの労働者でさえ、私に説明と支援を求めてきた。そして、選出が行なわれた。まだリベラルであった工場主プロホロフは「労働者議会 *рабочий парламент*」に対して場所を提供した。「工場憲法」は一二月蜂起まで全く中断することなく機能した(26)。



このメンシェヴィキ一流の用語で彩られた回想によって、我々は蜂起以前のかかなり早い段階で、すでにプロホロフ労働者たちが革命的な道に歩み出していたことを知る。

本論前段で触れたように、プレスニャ<sup>II</sup>ハモフニキ地区ソヴェト（プレスニャのモスクワ川対岸ハモフニキ地区は工場も少なく、労働組織が最もおくれ、革命三党派は拠点を持たない）の存在は明らかであるが、この地区ソヴェト議長にプロホロフ労働者（エスエル）のИ・И・パウリンが、同書記にガルヴィが就き、代議員数は六〇―七〇人規模であった。<sup>(27)</sup>

一二月六日の全市ソヴェトの決定に関して、やはりガルヴィが回想している——プレスニャ地区ソヴェト拡大会議（彼は時期を忘却しているが、これが次に示すクラスノフのいう「協議会」に相当すれば、八日である）で、この決定は我々に何の動揺も与えなかった。しかし、地区ソヴェトのエスエル代表マルトウイノフは、革命家としてこの決定は不可避だと思いが、「部隊」はまだ弱体で、武装は悪く、農民は全体として革命に登場しておらず、彼らなしには労働者も革命的インテリゲンツィヤも勝利はおぼつかないであろう、と述べた。彼の発言は印象的で、そこには多くの真実があった。<sup>(28)</sup>

一方、プロホロフ労働者（エスエル）M・クラスノフはこういう——一二月八日、近くの医師の所で、プレスニャとハモフニキの「協議会」があり、工場、鉄道、軍関係、郵便などから代表者が出席し、ストを九日朝九時に開始し、まずプロホロフ、ブレスト線がスト入りし、残部が正午までに全て停止することを決定した。その際、アレクサンドロフ兵営から来た兵士は、彼らも労働者の動きに合流するであろうと述べた。九日、ストは予定より遅れて始まったが、労働者は隊列を組んで街頭に出て、ニージナヤ・プレスニャで五〇〇〇人の示威行動となり、地区を一巡して、プロホロフ工場大食堂へ一旦、戻った。午後一時に再集合し、二〇〇〇人が中小工場の「はぎ取り」にかかった

が、ダニエロフカのアレクサンドル兵営へ向かったのは三〇〇—四〇〇人で、兵士たちは武装解除されて、街頭へは出れないと答えた。警官と交戦しつつ、シレーデル工場を停止させ、夕闇となったため、プロホロフへ戻った。<sup>(29)</sup>

これらガルヴィとクラスノフの回想によれば、プレスニャがスト入りしたのは七日ではない。一方で市中心部と同じ七日にプレスニャもスト入りしたとする資料もあるが、それは疑しい。<sup>(30)</sup>この問題で我々がまず確認すればよいことは、プレスニャでも準備が悪かったことである。同地区の代表的組織者の一人となったポリシェヴィキのリトヴィン || セドイ (以下、セドイ) はこの点をこう回想する——蜂起の日は近づいた。しかし、蜂起計画もバリケード構築計画も運動指導者らの溜り場もなかった。やがて (期日特定不能) 二五人が集会し、七日ないし八日にプレスニャでデモをやり、その戦闘本部 (боевой штаб) を創設することを決めた。<sup>(31)</sup>

この集会に出た者はミウツスキー市電車庫、製糖工場、マモントフ工場、シミット工場、グラチェフ工場など社会民主党系が強かった所からであり、右のクラスノフの「協議会」はエスエル系と思えるから、結局のところ、プレスニャは七日正午のゼネスト開始に合わせる事が出来ず、それぞれに開始時期を模索していたと推測される。このことは、市中央組織とプレスニャの連絡の悪さも示していた。<sup>(32)</sup>

市中心部より立ち遅れたプレスニャでは、急いで組織的中心の創出に取りかかった。この点をめぐる関係者たちの回想は非常に混乱しており、この種の組織として、「革命委員会」、「ストライキ委員会」、「戦闘的労働者武装部隊本部」(ないし「ビューロー」)、「軍事ソヴェト」、「地方ソヴェト」そして「プレスニャ (ないし地区) 戦闘委員会」の存在が様々に指摘されているが、これらが創設されたのは九日以降であることでは一致している。プロホロフ労働者 B・И・イヴァノフが言うように、九日夜の集会で、プロホロフ労働者たちが指導者たちに決定的な行動を求めたこと<sup>(33)</sup>がこれらの組織化に一定の作用をしたと思える。

さて、右の諸組織について同一のものを名称を違えていることもおそらくあって整理は困難であるが、関連文献に最も多く登場するのは「革命委員会」と「戦闘的労働者武装部隊本部」の二つである。まず前者について、例えば、B・И・イヴァノフは十日の少し前に組織され、全市ソヴェトのプロホロフ代議員、〔プロホロフ〕工場委員会のメンバー、それに「部隊」長のセドイとメドヴェヂ（エスエル）が参加したとし、<sup>(34)</sup>また、П・E・エフィーモフは、これは全市ソヴェトの地区集会（地区ソヴェトのことか）を改称したもので、プロホロフの「議会」で発生したとする。<sup>(35)</sup>これらに出る工場委員会と「議会」は先に引用したガルヴィが言うものである。全体として「革命委員会」はプロホロフ労働者を中心にして「部隊」関係者も入るプロホロフ工場の革命センターとしてあった印象をうける。<sup>(36)</sup>これに対し、「戦闘的労働者武装部隊本部」の方は、その発生が九日説<sup>(37)</sup>と十一日以前説<sup>(38)</sup>に分かれるが、これはプレスニャ全地区を対象とした戦闘行動指導組織で、革命三党派が結集し、互選で「部隊」長にメドヴェヂとセドイを選んだ。<sup>(39)</sup>これに参加した人物は、資料により若干の出入りがあるが、二人のほか、エスエルからマルトウイノフ（後にイリンと交替）、ポリシェヴィキからドッセル（＝レーシニイ）、メンシェヴィキからザールとガルヴィである。この「本部」と「軍事ソヴェト」<sup>(40)</sup>、「プレスニャ戦闘委員会」<sup>(41)</sup>、「地区戦闘委員会」<sup>(42)</sup>、「地方ソヴェト」<sup>(43)</sup>は、それぞれの構成員が極めて近似しているから、同一組織を意味するとみてよいであろう。ただ、右記のうち残る一つの「ストライキ委員会」は「本部」と構成員が似ているが、筆者の知る限り、この存在を指摘しているのはプロホロフの織工A・C・モロゾーヴァ<sup>(44)</sup>と同じくプロホロフのM・クラスノフ<sup>(45)</sup>のみであるから、彼らはこれを「革命委員会」と取り違えている可能性もある。

このようにプレスニャにはプロホロフに拠点をおく「革命委員会」と地区「部隊」の結集を図る「本部」の二大組織が並存していたと思えるが、両者の関係は「部隊」長が両方に顔を出し、後述するように後者もプロホロフ（大食

堂)に設置されたことから、これら二組織の境界は不分明であった。いずれにせよ、プロホロフ工場に革命諸党派と労働者らの統一戦線が形成されたことはたしかである。

そして、文字通りこの戦線を構築すべく登場したのが「部隊」であった。当時のプレスニャにおける「部隊」の規模について定説はない。このことは、一般住民の自発的参加といった、この組織体特有の性格によるところも大きい。<sup>(46)</sup> プレスニャで最もまとまって「部隊」が存在したのはマモントフ、シミット、プロホロフの三工場とブレスト鉄道であるが、各々について簡単に見てみよう。

マモントフ工場の場合、一二月九日に四〇〇人参加の集会を開いたが、蜂起反対者も多く、その場に残った三〇人程が全員「部隊」に入り、その「部隊」長にΦ・C・シハーノフがなって、結局、隊員数は六〇人程に達した。<sup>(47)</sup> この工場主は工場防衛のために武器を購入したが、それを労働者が革命のために使ったともいわれる。<sup>(48)</sup>

シミット工場には、工場主H・Π・シミットが労働者に協力的であったことが大きく影響して、最も良く武装された「部隊」の一つが存在した。一九〇四年の父親の死により、経営権を握った彼は当時まだ大学生で、一九〇五年五月から九時間労働日を導入し、賃上げ、労働者医療、病気とスト時の賃金完全支給、労働者食堂や図書館の整備をやり、他工場のスト支援資金を提供し、夏期に帰村する労働者に農村に非合法文献の普及を依頼するなどをして、労働者から尊敬を集めていた人物で、五年革命時に革命派への資金提供をなしたことで著名なサツヴァ・モロゾフと並び、まさに革命的な資本家であった。<sup>(49)</sup> 同工場には一二月以前にモーゼルとブローニングで武装した三六人の「部隊」がすでにあった。<sup>(51)</sup> この隊長となったのはM・ニコラーエフで、彼はプロホロフ工場学校を卒業して同工場に入った後、モスクワ及びその郊外の機械車輛製造工場、電気工場、そしてブレスト鉄道を経て、一九〇五年夏に一旦シミット工場に仕上げ工として勤めた後、ペテルブルク・ナルヴァ地区で働き、一一月末に再び同工場へ戻ったのである。<sup>(52)</sup>

さて、プロホロフ工場であるが、ここではエスエル党モスクワ委員会の指示で、プレスニャ地区組織者となったB・C・モロゾフの発言がまず注目される。彼によれば、一九〇五年秋にオルグをした結果、約三〇人からなる「部隊」がつくられた。同工場捺染工A・Φ・アクーロフ（＝オシーポフ）は、工場付近のエスエルのアジトに秋にかけて武器を貯蔵したが、それでも武器は大変少なく、最終的に武装した者は二〇〇人にとどまった。<sup>(53)</sup>この数字はプロホロフ以外の者も含んでいると思えるが、一方、プロホロフのみに「部隊」二五〇人という数字もあり、<sup>(54)</sup>別にプロホロフのエスエル系「部隊」一五人、メンシェヴィキ系「部隊」一〇―二〇人とも言われるが、<sup>(55)</sup>これは過小評価の感じがする。

工場主H・И・プロホロフはリベラルで学問好きな人物として労働者間で評判は良く、蜂起時も労働者への食糧供給を続け、一二月九日には賃金も支給しており、それを労働者代表がスト資金に一％カットした。<sup>(56)</sup>

最後にブレスト鉄道関係であるが、関連資料に乏しい。その「部隊」長E・ロザノフは他の、特にグラチェフ工場の「部隊」がそこに加わっていたという。<sup>(57)</sup>数的にはブレスト二〇―二二人、グラチェフ一五人という資料があるが、この資料は「部隊」員数全般を過小評価する傾向にあるものである。

右にみた「本部」は、これら「部隊」を統合し、組織的有機的な機動を期待して、一二月九日には「部隊」を十人組（*десятка*）に分けたが、<sup>(59)</sup>実際にはそのようには動かなかったようである。「部隊」自体が大変に多様で、工場等の拠点毎に編成され、武装の度合いも異なり、しかもその上部組織（革命党派）が不同で、一致した歩調を保つことが困難であり、さらには「本部」の指令が後手に回っていた。「本部」にあてられたプロホロフ工場食堂では、ボリシェヴィキのセドイ派とエスエルのメドヴェヂ派が半々に分かれて陣取っていたし、<sup>(60)</sup>シミット「部隊」のM・ニコ

ラエフの回想によれば、各工場の「部隊」は独立単位であり、ようやく蜂起最終盤になって、シミットとプロホロフの両「部隊」の組織的結合が図られたのである。<sup>(61)</sup>シミットのH・ルキヤノフによれば、その「部隊」は絶えず市中心部へ行こうとしたが、どこからも指令がなく、それを果せないでいた。<sup>(62)</sup>

こうした「本部」に対する不満を孕みつつプレスニャでの蜂起は進展したことになるが、もっともその中央にいたセドイに言わせれば、状況は全般的に良好であった。彼によれば、「本部」はプレスニャを五つの戦闘区に分割し、上掲の各「部隊」に最寄り区を分担させ、特にクードリンスカヤ広場からプレスニャ関門までの「第一級の意味を有する」区を「本部」自体で担当したという。<sup>(63)</sup>ここで言う分担ないし担当はいわば持ち場を確保するという意味であって、彼自身明言はしていないが、プレスニャから外部へ打って出る発想はなく、まず考えられたことはプレスニャの防衛＝解放区化であったと思える。

更にセドイによれば、「本部」には財政、武器、弾薬、医療、裁判の各担当がいて、「政治審理局」なる懲罰機構もあり、その代表者B・フィドレロフスキーは労働者を厳しく扱ったカザークの大佐一名を銃殺した。<sup>(64)</sup>一二月八日ないし九日にはプロホロフの大食堂で二人の同志の「挑発行為」に対する裁判があり、自宅拘禁を決定している。<sup>(65)</sup>「本部」はパン屋に地区住民向けにパンを焼かせ、居酒屋を閉鎖するなどしたから、極めて一時的にしる、プレスニャはあたかも「自治共和国」となり、住民は「本部」を共和国政府とみなして、許認可をそこに求めたのである。<sup>(66)</sup>しかし、そうした「共和国」<sup>(67)</sup>は、全市から見れば、孤立した存在であった。

さて、以上にみた諸組織の創出を慌しくなしつつ、一二月十日もやはり労働者たちの街頭示威行動がくりひろげられた。この日、プロホロフからは「土地と自由」と書かれた旗を先頭にデモがなされ、その染色部門からは「射つな、ともに労働者だ」と兵士によびかけた別の旗が出た。彼らは路上でカザークの一隊と遭遇し、その士官と「交

「渉」をした。プレスニヤの気分は全般に高揚していて、一部の者は自発的にバリケードを街頭に構築し出しており、彼らが運動指導部の立ち遅れを指摘するほどであった。証言により時刻は異なるが、この十日に、プロホロフ大食堂で集会がもたれて、地区のバリケード化が決定され、ただちに実行に移された。街灯を破壊した闇の中で、一般住民も参加し、プレスニヤはバリケードで包囲されるところとなった。市中心部でのバリケード構築におくれること一日である。住民たちは泥棒防止のため、各戸に見張りを立て、地区のパトロールを始めた。<sup>(68)</sup>バリケードはやがて地区の「自治」を保障する象徴となったが、同時にそれはプレスニヤと市中心部を物理的に切断した。更に、全プレスニヤにサービスしていたクードリンスカヤ広場の電話局が燃上したこともその孤立化を促進した。<sup>(69)</sup>

一日、プロホロフ労働者たちは同工場消防隊から鉄槌を奪って、バリケード構築に使用した。この日、蜂起側から軍隊への最初の攻撃がみられた。つまり、「部隊」はプレスニヤ関門にあった露店を燃やし、出動したカザーク隊に射撃して、一人を死亡させた。この関門をめぐる攻防は翌日も続き、カザークと歩兵隊がそのバリケード解除を試みたのに対して、「部隊」は応戦した。<sup>(70)</sup>

プレスニヤの奮闘に対し、他地区から支援が無いことはすぐに判明した。当局の網をかいくぐってプレスニヤに潜入してきた活動家たちは支援の困難さを述べた。ザモスクヴォレーチエ地区のコロメンスキー工場から来た者は、その労働者の大半は農村へ散ってしまい、その「部隊」は一五―二〇人程の少数で、プレスニヤ支援に回れないと言った。<sup>(71)</sup>時間の経過とともに元来少なかった武器の消耗が目立ち出した。セドイは当時、プレスニヤにあったのはライフと小銃二〇〇丁、連発拳銃五〇〇―六〇〇丁、サーベル一五〇本そして爆弾五〇発でしかなかったと証言している。<sup>(72)</sup>一一、一二日と誰もプレスニヤを応援せず、モスクワの $\frac{3}{4}$ はすでに平和に暮しているとする風説が広まった。<sup>(73)</sup>

一二日午後、プレスニヤに向け、ヴァガニコフスコエ墓地方向から最初の砲撃が加えられた。それは地区を支配す

る蜂起側に弾圧当局が外部から加える、最もありえた攻撃であった。結果的に蜂起を直接解体させた砲撃に対し、蜂起側は一連の過程で三度まで大砲を奪取する機会をえたが、それを使える者はいなかったのである。<sup>(74)</sup> 孤立する中で、火力が決定的に不足し、しかも本格的にそれを扱える者が不在という状況下で、「部隊」は地区内を移動しつつ、苦闘していた。

「部隊」が果したことは基本的に「自治」の防衛であった。一二―一三日に、プレスニャへ「カフカース」、「大学」、「鉄道」などの「部隊」残党がやってきたが、セドイに言わせれば、彼らはプレスニャに期待をかけ、その力量を過大評価していた。<sup>(75)</sup> 後に見るように、弾圧当局も同様な過大評価をしていたから、プレスニャはにわかには全市的注目をあびることになった。

砲撃にさらされて、蜂起側は市中央部でと同様に少人数に分散するパルチザン戦術を採用した。一三日になってプロホロフ工場に「部隊」が公然と姿を現わした。尚、後のプレスニャ関係起訴状はこの時のプロホロフ、マモントフ、シミット及び製糖の各「部隊」を合計四〇〇―六〇〇人としている。彼らはまず警官の武装解除をめざして地区内全ての交番を襲撃した。<sup>(76)</sup> さらに「部隊」は各地でカザークとの交戦を繰り返したが、プレスニャでの最大の会戦地点は大きなバリケードが築かれたプレスニャ関門と動物園周辺の二ヶ所となった。<sup>(77)</sup> これらのバリケードをはさむ交戦がモスクワ武装蜂起の最も代表的かつ象徴的な戦闘となる。この夜、カザークと消防士がプレスニャ橋のバリケードに火をかけたが、蜂起側は「部隊」に守られて、それを復旧した。<sup>(78)</sup>

一四日、「部隊」の多くは疲労したが、総督の住民に対する軍隊への協力よびかけが逆に彼らを今一度奮起させることとなった。<sup>(79)</sup> しかし、既に見たように市中心部ではこの日、すでに運動停止が検討され出していた。夕方、プロホロフの「部隊」が刑事警察部長ヴォイロシニコフを逮捕し、銃殺した。<sup>(80)</sup>

プレスニヤ蜂起の過程で、兵士が蜂起側に加担した具体的事例を示す記述は筆者が読む限り極めて乏しいが、この一四日に、ネスヴィージ連隊の兵士らが実包六五発を「部隊」に提供している<sup>(81)</sup>。やはり、プレスニヤでも兵士との連帯は基本的にはなかったとみておきたい。

一五日に開かれた全市ソヴェト会議は、既に述べたように、出席者が少なかったが、プロホロフ関係者の大半は欠席した。同時刻、彼らは地区ソヴェト会議に結集していた<sup>(82)</sup>。プレスニヤが組織的に孤立したことは明らかであった。この日に墓地方向から加えられた砲撃は激しく、住民にかなりの死傷者を出して、パニック状態となり、多くの者が農村へ逃げ出し始めた<sup>(83)</sup>。「革命委員会」等指導部でさえ風聞から状況判断をする有様で、それはこの日にザモスクヴォレーチエとゴロドスコイ両地区は蜂起を停止し、バリケードを解体、通りを駈者が行き交い、商店が営業を再開したこと、プトウイリスキー地区は闘争を継続しているが、そこでもバリケード撤去が始まっていることなどであった<sup>(84)</sup>。

状況は益々、プレスニヤにとり悪化の度を加え、指導部は蜂起の継続か否かの判断をせまられた。プロホロフ労働者B・И・イヴァーノフによれば、一五日夜に「革命委員会」、「部隊」長、革命党派が参加する集会があり、この問題を一六日未明まで検討した結果、「工場の操業〔再開〕と蜂起中止をモスクワへ知らせるためあらゆる手段をとることを決め、全員にプレスニヤから脱出するよう勧告することにした<sup>(85)</sup>。しかし、この一六日未明蜂起中止決定説には異論がある。П・E・エフィーモフは一六日の「革命委員会」は激論四時間のすえ、闘争継続を決したとする<sup>(86)</sup>。しかし、これは他の資料に比すると疑しい。セドイも一六日中止決定を述べ、さらにガルヴィはより詳しくこう様子を描写している——一六日、プレスニヤ地区ソヴェトの最後の会議〔イヴァーノフのいう集会のこと〕があり、エスエルのイリインは、我々は敗れたが、パリ・コミューンと同様に名誉ある敗北をしよう、皆がバリケードを出て死のうと発言し、ボリシエヴィキのレーシニイは、イリインの言うような「虚飾な」自殺はご免だ、最後まで闘うと言った。

これらに對して、エフィーモフと私は反對した。革命は続いており、無駄死は避けるべきだ。これは最初で、最後の闘いではない、と主張した。結局、地区外側のバリケードとパトロールを残し、武器を隠して、「部隊」、ソヴェト員をプレスニャから脱出させることに決した。<sup>(88)</sup>

別の資料によれば、ガルヴィのいう地区ソヴェト会議（一六日）で、多数派が一八日夜にパルチザン戦を終え、一九日にはストを終了することに賛成し、更に「軍事ソヴェト」と「部隊」隊長の会議「『本部』会議をさす？」では、プレスニャのみが奮闘しても無意味で、「部隊」は消耗し、完全に包囲されたこと故、地区ソヴェトの決定を考慮して一八日夜で闘争を終了することに多数派が同意した。<sup>(89)</sup>

従って、限られた資料からではあるが、ここでは一六日に運動指導部分によってプレスニャでの蜂起中止が決定されたとみておきたい。

この日、ペテルブルク（セミヨーノフ連隊）とワルシャワ（ラドガ連隊）からモスクワへ派兵があることをプレスニャは知った。蜂起側が得ていた新聞情報によれば、プレスニャには一万人の良く武装された「部隊」がいることになっていたので、<sup>(90)</sup>彼らは徹底した弾圧が加えられることをおそれていたと思える。さらにこの昼に、ツインデリ工場の就業再開の知らせが届き、その労働者の一部がプレスニャに来て闘っていたこともあって、ショックは大きく、動揺が拡がった。<sup>(91)</sup>

一六日、「プレスニャ戦闘労働者部隊司令官」を差出人として「本部」から各「部隊」へ次のようなよびかけ<sup>(92)</sup>がでた――

我々は数百万の農民を奮起させるに力不足であった。モスクワ守備隊は中立のまま、錠をかけられた兵営にとどまるだけである。我々は全世界で一人だ。全世界が我々をみている。一方は呪いをもち、他方は深い共感をもって。孤立した者たちは我々に

助けを求めてきている。「労働者武装部隊員(ドルジーニク ДРЪЖНИК)」は偉大な言葉で、革命がある所、必ずそれがあるであろう。この言葉、そしてプレスニャは我々にとり偉大な記念碑である。

敵はプレスニャを恐れている。それは我々を憎悪し、燃やしつけ粹砕したいと思っよう。敵は妻たちや労働者の姉妹たちへの暴力をなそうとしていよう。労働者の子供は馬蹄とツァーリの酔った兵士の長靴で踏みつけられるだろう。

我々は始めた。そして我々は終ろうとしている。土曜日〔十七日〕夜にはバリケードは取りこわされ、全員が遠くへ分散するであろう。

敵は加えられた恥辱を許さず、血、暴力そして死が我々五人ずつを次々に襲うであろう。

しかし、これはなんでもない。未来は労働者階級のためにあるのだ。あらゆる国々で、世代世代がプレスニャの経験によって、不屈さを学ぶであろう。私は日曜日〔十八日〕に休憩〔原語は休憩、休田を意味する РД〕を分け与える指令を出す。全ての工場は就業し、「部隊」隊長は武器を隠す場所を指示するであろう。

我々にとり死はおそれるべきものではない。もし敵が我々の計画、我々の自由(БОЯ)を邪魔するのならば、我々の退却は敵にとり高価なものとなるろう。

闘争と労働者の勝利万才。

## 七 蜂起の帰結

既に述べたように、Г・А・ミン大佐の率いるセミョーノフ連隊がモスクワに到着したのは一二月一五日であった。カザン線の事態を知ったミンは即日、同線むけ特別懲罰隊を編成し、その隊長にリマン大佐を任命した。同隊に下った命令は、蜂起指導者の逮捕、「部隊」殲滅をペロヴォ駅からコロムナ市までの間に行ない、鉄道の運行を平常に復することであった。一六日昼、懲罰隊は二列車を仕立てて出発し、一九日までにその任務を完了した。この過程で、ウフトムスキーは銃殺され、少なくとも死者五五人を数えた。<sup>(1)</sup>

プレスニャに向つたミン鎮圧隊はセミヨーノフ連隊の第一擲弾兵大砲旅団（大砲四門）、モスクワ守備隊のカザーク騎兵中隊半分（歩兵大砲八門、機関銃二台）から成り立つた。<sup>(2)</sup>ミンは詳細な攻略作戦を分隊長に指示した。<sup>(3)</sup>

一二月一七日未明四時、プレスニャ関門の哨所から歩兵の進行を伝える連絡がプロホロフの「本部」に届き、その後各所から同様な知らせが続いた。朝五時、プレスニャは完全に包囲されたことが判明した。砲兵はヴァガニコフスコエ墓地、トリョフゴールナヤ関門、ドロゴミロフスキー橋、そしてクードリンスカヤ広場に陣取り、ヂェヴァチンスキー横丁には機関銃が据えられた。

七時に砲撃が開始され、鎮圧隊は三縦隊に分かれて、バリケード解体と応戦する家屋の破壊に着手した。圧倒的な火力の下、帰結は自ら明白であった。シミット工場、マモントフ工場、プロホロフの労働者宿舎などが砲撃で燃上を始めた。一分間に五―七発の集中砲火が止むことなく続いた。ポーランドから来たラドガ連隊が遅れて鎮圧隊に加わった。現場にいたK・レヴィンは、「部隊」が解体してしまったのに、何故、プレスニャが戦闘を続けるのか分からなかったと回想する。<sup>(4)</sup>各地で火災が発生し、逃げまどう人々はナポレオンのモスクワ進攻の再現かと口々に話した。ブレスト駅からバリシャヤ・プレスニャまでがまたたくま制圧され、徹底した家宅搜索が開始された。この間に、「部隊」のほとんどが武装解除された。この日に逮捕された工場主シミットの解放をめざし、労働者が二度に渡り攻勢をかけたが失敗し、六人が死亡した。<sup>(5)</sup>

一八日朝からバリケードの解体と除去が一般住民を加えて、兵士の手でなされたが、プロホロフ周辺のみ到最后までそれは残った。<sup>(6)</sup>

この日に出たモスクワ・ソヴェト執行委員会のゼネスト中止のよびかけは大概こういふ――<sup>(7)</sup>

同志の労働者諸君。モスクワの労働者階級が自己の権利と自由を求める必死の闘争を行ってすでに一週間が経った。この組織的闘争で、モスクワのプロレタリアートはロシアの解放をめざす闘士の隊列で名誉ある地位を占めた。

しかし、この打撃によっても暴力と専横の支配はまだ最終的に消滅していない。何故か。第一に、モスクワの労働者の闘争は他都市労働人民の行動と一致しなかった。第二に、我が兄弟である兵士が人民の側へ移行するに至らなかった。

だが、我が流血の闘争は人民の自由の勝利に近づかなかったのか。そうではない。ツァーリ政府は我々からささいな自由さえ次々と奪い取り出した。もし我々が闘争で対応しなければ、政府は我々を無残に押し潰したであろう。そして労働者階級は今まで以上に抑圧されたであろう。

我々の義務は次を示すことであつた。労働者階級がその政治的利益の擁護の任にあたること、そしてもし必要なら武器を取ってそれをなすことである。そして我々はこの義務を果たしたのだ。政府の計画は人民闘争の名誉ある一週間により、混乱させられた。ここにこの闘争の巨大な意義がある。しかし、それだけではない。

モスクワはロシアの心臓だ。モスクワの労働人民はそこで専制の打倒と全人民的憲法制定会議を求めたのだ。このことは専制への驚くべき打撃だ。専制は全国、いやヨーロッパにおいてその信用を失遂した。専制はモスクワで蜂起が繰り返されれば、それが全国の人民武装蜂起への合図となり、人民の完全な勝利となることを恐れている。しかし、その最終的勝利まで執拗な闘争が必要だ。それを休めば、政府はまた元通りに人民を抑圧するだろう。

この間、兵士は兄弟殺しを強いられた。だが、どの兵士がこのようなことを長く続けられるというのか。兵士は人間の心を持つていなのだ。政府はモスクワ守備隊の大半の兵士が兵営外へ出ることをおそれた。モスクワの歩兵はかなりの程度、蜂起した人民の側にあつたから、政府は彼らを兵営に閉じ込めざるをえなかったのだ。兵士が公然と蜂起側へ合流し、その武器を全人民共通の敵へ向けることが必要である。このことは必要なだけでなく、不可避的でさえある。これがなされる時は、もはや遠いことではない。

同志諸君。我が闘争と我が犠牲は空しいものではないのだ。我々は自己の義務を果たしたのだ。今、我々はモスクワでの政治ストを止める必要がある。それは全ロシア的政治ストと全人民的武装蜂起とをよりうまく準備するためにだ。諸君、開始した時と同様に一斉にストを止めよう。そして、労働人民と軍隊の力を合わせて、ツァーリ専制の最終的な転覆をめざそう。

モスクワ・プロレタリアート蜂起の十二月の週間は終わった。全人民的蜂起、抑圧と専横の体制に対する勝利万才。民主共和国万才。

おそらく、このよびかけをプレスニヤの人々は知らない。

一九日、鎮圧隊は念を押すように馬場に結集した軍の一部でもって補強され、製糖工場とプロホロフを襲った。前者では武器を所持した二〇人を逮捕し、その際抵抗する三人を銃殺した。プロホロフは全般に平静で、無血の「開城」となり、四一〇人が武器を引き渡し、工場本館に白旗が立った。<sup>(8)</sup>

この日、ミンが発したリマン懲罰隊が最後のつめを行ない、カザン線リュベルツイ駅付近で激戦となり、反乱側は二〇〇人を越える損失を出したと推定され、裁判なしにカザン線労働者の銃殺がなされた。<sup>(9)</sup>

モスクワ武装蜂起はこの一九日のプロホロフ降伏とカザン線鎮圧で最終的に終結したと考えられる。七日からの蜂起全期間における反乱側の犠牲者数については幾つかの数字がある。十月ゼネスト以降に結成された学生と医師の救急組織によれば、死者一七四人、負傷八八五人の計一〇五九人（男九二二人、女一三七人）、『モスクワ報知』紙は墓地に埋葬された者を四五四人とする。いずれにせよ、死傷者の圧倒的部分は一般住民であったと推定される。<sup>(10)</sup> 一方、警察資料は革命家たちの損失を全期間を通じ一万一万二〇〇〇人、軍・警察側は七〇人をこえないとするが、各々過大、過小数值に思える。トロツキーは住民の約一〇〇〇〇人が殺され、同数が負傷し、兵士の死傷は数百であったろうと推測している。<sup>(12)</sup>

客観的な政治情勢から見れば、この一二月武装蜂起の時期は十月一七日詔書公布をはさむことで十月ゼネスト時は大きく異っていた。詔書に満足した中間部分はその反政府運動を停止し、革命派と人民大衆がその運動を一人継続した時期であった。

その運動を担った工場労働者、兵士、鉄道労働者はそれぞれに身辺事情と闘争の歴史を有していたが、彼らを一つ

にまとめる契機となったのは政府の十月一七日詔書での約束不履行、裏切りに対する怒りであったと思える。このことは、今次の闘争にあたって一二月六日に採択された檄「全ての労働者、兵士、そして市民へ」あるいは一二月八日にモスクワ・ソヴェト執行委員会が出したゼネスト中止よびかけが明確に示している。

そうした怨念を踏台として、この蜂起指導部は人民的な憲法制定会議を通じる民主共和国の実現という最高目標の政治的設定をなした。一月スト以降、俄然、厳しさを増大させた権力側の反攻に対して、この時期を逸すれば取り返しがつかなくなるとする焦りにも似た危機感が革命諸党派を束ね、一二月初旬の段階で闘争へと踏み切る政治的判断をさせたと考えられる。右の努力目標の実現にむけて、革命三党派と「同盟」から成るゆるい統一戦線がとりあえず結成されたが、闘争中央指導部が躊躇を重ねつつも運動の開始に至ったことは、合理的総合的判断をくもらせる程の危機意識のなせるところであったとも思える。

本論で見たように、彼らはゼネストを武装蜂起へ発展させる、いわば二段階連続闘争論を採用したのであったが、実際には武装蜂起の具体像（案）を持たず、準備の悪さが認められた。

運動過程に於て、武装集団が権力機関を攻撃する動きは一つも見られず、また期待された兵士集団の参加は実現せず、反乱側の唯一の軍事力となるべき「部隊」は、従来を経験に忠実に、専ら防衛＝武装抵抗に徹したのであり、政府軍に対抗して「部隊」を本来的革命軍に変換する思想と実行性が欠落していたと言わなくてはならない。このように、モスクワの一二月は蜂起らしい蜂起ではなかった。

人民大衆の運動エネルギーは個別分散的に放出された。このことはプレスニヤ闘争の孤立によく象徴された。市中心部での闘争は周縁部での戦闘と有機的連関をみせることなく、そうでなくとも劣質な火力はいわば地区単位に消費された。

運動の展開が中央指導部の予想を超えて先に進んだことも本論でみた通りである。バリケード構築、兵営へのデモなどは民衆が独自になしたのであった。こうした「組織する」側と「組織される」側との齟齬については、単に戦術的なレベルからだけでなく、両側の意識や価値観の領域にまで及ぶ周到な検討が企てられてしかるべきであるが、ここでは本論をうけて、わずかな指摘をしておきたい。

ここで筆者は、「都市に居住する農民」をどう運動に「組織する（出来る）」かといったことを問題としたいのである。こうした問題設定は、当該期モスクワに生活し、一二月の運動に参加した人々の社会的相貌に照して、さほどの無理があることは考えられない。

蜂起の主体となるべき者たちには三者各様に農民的性格が顕著であった。工場労働者については、本論に示したプロホロフ労働者の回想から明らかのように、活動的な労働者が特に社会民主党に関する党派性の観念を欠落させ、その多くが感覚的にエスエルにひかれていたし、更に一般的労働者レベルでは、闘争の過程で出現した「農村への一斉逃亡」に象徴されたように、農村との結びつきをいわば精神的な支えとして都市での労働生活を営んでいたふしがある。兵士については、政府が新たな徴兵を行うたびに、それが働き手を奪って農民経営を掘りくずし、農民騒擾が繰り返されたように<sup>(13)</sup>、その農民的性格は明確であった。そして、反乱したロストフ連隊兵士の要求の一つは土地の社会化であった。更に鉄道労働者については、これまた本論に見たように、ナロードニキ用語を散りばめた「同盟」の二つの檄にその親農民的性格は一つとして示され、また闘争の中心路線となったカザン線各駅に「人民権 Народное право」が樹立されたことは、エスエルの一大源泉となった「人民権 Партия народного права」の何らかの影響をも示していると考えられる（ただし、鉄道労働者の社会的存在形態についてはさらなる究明が必要な研究状況にある）。このような運動主体に共通して見られた性格はまずよく明記されるべきことと思える。

しかし、実際には、近代ロシアの都市に生活する人民の身体深くに色濃くしみこんでいた農民的性格を無視ないし軽視することが、恒常的に繰り返えされてきたことも確かであろう。

一二月のモスクワで、何故、軍隊兵士が人民側に移行しなかったをめぐり、ある警官が次の話をしている——兵士はそのほとんどが農民である。農民的要求は彼らにとり貴重だ。（しかし）革命家たちはツァーリを倒し、自らが権力をその手に握ることを欲しているだけで、農民には何もやらないのだ。ある集会で、一人の男が出て、農民の利益、〔その〕土地に対する要求を擁護し始めたら、革命家たちは彼をつかまえ、たたきのめしてしまった。<sup>(14)</sup>

この革命家たちは社会民主党系の人たちであつたらうか。ここには兵士が農民たることの意味合いを理解しようとはしないかたくなな姿勢が明瞭である。本論で、ロストフ連隊兵士と革命家の出会いがむしろ逆効果をもたらしたのではないかと指摘したが、このことも広くこうした文脈で理解されるべき事柄であろう。

ガルヴィがプロホロフ労働者を「無学な田舎者」として扱ったこともすでに触れた。工場労働者を単一の均質なカテゴリーでとらえず、それを *фабричные* と *заводские* に二分し、前者を本来的工場労働者と区別することは一九世紀中葉以降、一貫してロシアのインテリらの間でなされてきたことであり、<sup>(15)</sup>この場合も彼はそれにならっているにすぎないのだが、「無学な田舎者」に何かを教えるといった態度だけからは、おそらく産み出されるものは少なかったように筆者には思えるのである。

ポリシェヴィキのセドイはプレスニャ敗北の理由をこう述べている——革命諸党派の大衆に対するあらゆる政治的活動が不足しており、特に農民を専制攻撃へと駆り立てられなかった。ロシア社会民主党と特にエスエルの組織が事態の進展に立ち遅れ、運動を指導出来なかった。<sup>(16)</sup>

現場の中心にいた一人として、セドイが蜂起参加者に「農民」を等しく見たとすれば、これを単なるエスエル批判

と読むことは軽薄であろう。右に述べた筆者の議論に立てば、モスクワ武装蜂起にまつわる「反省」の弁として、これが事態の本質に最も触れていると思える。

註(ゴチック数字は末尾の参考文献一覽番号、漢数字は頁数)

二 鉄道労働者の動向

- (1) 51 〓 六節、特に註(27)
- (2) 26 〓 四一
- (3) 21 〓 一〇〇
- (4) 29 〓 七六
- (5) 26 〓 三九―四〇
- (6) 5 〓 二五―二七、21 〓 一〇三―一〇四、22 〓 九、26 〓 四三、29 〓 七七、30 〓 四三、四八
- (7) 21 〓 一〇三、30 〓 四四
- (8) 26 〓 四三
- (9) 7 (六号) 〓 四七
- (10) 5 〓 二八、7 (六号) 〓 二四、二七―二八、30 〓 五一
- (11) 21 〓 一〇六
- (12) 7 (六号) 〓 二九以下、26 〓 四七
- (13) 5 〓 二九―三〇、7 (七号) 〓 八四、21 〓 一〇九―一一〇、26 〓 四八―四九、29 〓 八二―八四、30 〓 五四―五六
- (14) 5 〓 三〇、20 〓 三七、27 〓 七三―七五、26 〓 四九、29 〓 八四、30 〓 六六
- (15) 26 〓 五〇、さらに22 〓 一〇、5 〓 三一、46 〓 一九七もみよ。
- (16) 5 〓 三一、26 〓 五〇―五一。プシカリョーヴァはこの点をめぐる社会民主党の無為を無視している。45 〓 一四八―一五〇をみよ。
- (17) 一〇月鉄道ストについては、とりあえず46の七節を参照。

- (18) 17 || 七四―七五
- (19) 30 || 七八
- (20) 17 || 九七
- (21) 5 || 三五―三六。このストライキ委員会に出席したガルヴィによれば、鉄道代表者がストの組織的中止問題を提出して激論になり、リベラル || 民主派インテリや専門職業家連盟は詔書を自らの勝利とし、メンシェヴィキとボリシェヴィキは一致して、それを批判した。結局、更なる闘争を組織し武装するために、ゼネストを中止するという妥協が成立した。38 || 五七二―五七四をみよ。
- (22) 17 || 七〇、二一六―二一七
- (23) 19 || 七四
- (24) 19 || 一〇一―一〇二、一〇六
- (25) 26 || 五三―五五
- (26) 22 || 一一―一三、26 || 五四、27 || 八〇―八一
- (27) 5 || 四二
- (28) 20 || 五七、六一
- (29) 30 || 一八九以下
- (30) 26 || 五九
- (31) 26 || 六一
- (32) 38 || 六〇―
- (33) 27 || 八三
- (34) 26 || 五八、48 || 二六一もみよ。
- (35) 5 || 四三、26 || 六一―六二
- (36) 27 || 八五
- (37) 27 || 一〇五―一〇六、30 || 八五、46 || 一八七以下

(38) 25 || 一〇四、42 || 七六、48 || 二六四

(39) 26 || 六二、48 || 二六五

(40) 25 || 一〇八

(41) 30 || 一〇九。2 || 五、48 || 二六七はここでゼネストを決定した、とするが疑しい。

(42) 26 || 六二、六三

(43) 45 || 一九八

(44) 22 || 一〇

(45) 42 || 一四八、一四九

(46) 46 || 一九一

(47) 48 || 二六八

(48) 45 || 一九九

(49) 2 || 一七一、一八、5 || 四三、四六、20 || 七七、七八、26 || 六三、29 || 八七、30 || 一一、一二、一三、39 || 二九、一三〇

(50) 39 || 七三四

(51) 2 || 一一七

(52) 以上は27 || 八五、八六

### 三 兵士の動向

(1) 47 || 一〇九

(2) 43 || 二六五

(3) 47 || 一一一

(4) 22 || 三七

(5) 43 || 二七八、47 || 一二四

(6) 43 || 二六八、二七〇、二七一

- (7) 41 || 四八―四九、43 || 二七一―二七二、47 || 一二四
- (8) 15 || 三五
- (9) 43 || 二七五―二七六
- (10) 43 || 二七六
- (11) 23 || 三九、41 || 五一
- (12) 23 || 三九―四〇、31 || 一二四、43 || 二八八―二八九
- (13) 31 || 一二四
- (14) 23 || 四〇、43 || 二八九
- (15) 31 || 一二五―一二六
- (16) 34 || 三四〇
- (17) 32 || 一 || 二五四
- (18) 47 || 一二六
- (19) この反乱の失敗原因をエスエルの冒険主義（時期尚早な蜂起決行）にもとめる議論（41 || 五四）は全く根拠がない。
- (20) 33 || 一二八
- (21) 23 || 四二―四三
- (22) 43 || 二八一
- (23) 23 || 四六
- (24) 31 || 一二八
- (25) 34 || 五八―五九、41 || 四八、43 || 二八五、47 || 一二六―一二七
- (26) 23 || 四七―四八
- (27) 38 || 五二七―五二八
- (28) シャブローフ（31 || 一二九）、ヤコヴレフ（42 || 一二二）、ブシネル（47 || 一二九）などもこの点を肯定する傾向にあるが、ヤコヴレフがその一方で（42 || 一三七、一四〇）、ポリシエヴィキ・モスクワ委員会は蜂起のモメントの正確な判断

を誤まり、蜂起はいわば自然死したという場合、単にモメントに限らず、問題の本質はより深いと筆者には思える。

(29) 43 || 二八六

(30) 23 || 四八

(31) 43 || 二八七、47 || 一二七

(32) 23 || 五一

(33) 18 || 一〇

(34) 17 || 六九

(35) 例えば、M・ヴァシーリエフ(11 || 三七—三八)によれば、ポリシェヴィキ・モスクワ委員会で、彼がロストフ連隊を兵営から出して政府主要機関を掌握し、主立った政治家を逮捕し、武器を奪取することを提案したが、ゼムリャーチカはセヴァストーポリとキエフの蜂起失敗を引き合いに出して「冒険」を差し控えるべきことをいい、マラート(シャントエール)はペテルブルクにモスクワの事態を伝えて、その指示を待つべきことを主張し、彼の提案は7対20で退けられた。

#### 四 ソヴェトと蜂起の決定過程

(1) ガルヴィはメンシェヴィキとポリシェヴィキが内部で「連合ソヴェト」を結成したとする。38 || 六〇六をみよ。

(2) 以上は15 || 九—一四、一九—二〇、二六、三〇、三四。ガルヴィは「ストライキ委員会」の代りに純粋にプロレタリアートの組織として労働者ソヴェトを置く目標を掲げたという。38 || 五七六をみよ。

(3) 38 || 六〇二。政党の地区組織でかなり良く判明しているポリシェヴィキの場合、そのザモスクヴォレーチエ地区責任組織者B・サフコフによれば、当該地区組織は他地区にとり模範的で、最底部に三一—五人からなる工場委員会(Фабрично-заводский комитет)をおき、「隣接する」幾つかの工場委員会が副区(подрайон)をつくり、それらが代議員を地区協議会(районная конференция)に出す。なお、当地区には七つの副区があった。地区協議会はさらに地区委員会(районный комитет)を互選し、ここにはモスクワ委員会の書記、煽動・宣伝グループの代表者及び同委が任命する地区責任組織者が加わった。17 || 五五四をみよ。19 || 一一—一三にも同様な記述がある。

(4) 2 || 一五〇

- (5) 11 || 二二五—二二六
- (6) 15 || 四六一—六〇。ヤコヴレフはこの第二回ソヴェトで労兵に蜂起準備に着手するよう決定があったというが、にわかに信じがたい。典拠もない。42 || 一〇七—一〇八をみよ。
- (7) 9 || 二〇九 (49 || 二二八)、34 || 三三六。同三三三—三三四もみよ。
- (8) 16 || 二五九。蜂起の主導性について、このペテルブルクとモスクワをめぐる問題はそれ程単純な事柄ではない。幾つかのレヴェルで考察する必要があるが、一般的な活動家たちでは、例えば、市電管理局に勤め、ミウスキ―車庫の「部隊」員であった、ボリシェヴィキのM・ヴィノグラードフはこう回想している——蜂起の初め、ペテルブルクが蜂起するだろうことに強い期待があった。そこにはすでに準備があり、モスクワでの蜂起は必ずそこに反応を見い出さるだろうといううわさがあった(18 || 六〇)。こうした彼の期待は、それが結果的に裏切られたことから、モスクワ蜂起の展開にとり、一定の作用をなしたと考えられる。
- また、蜂起指導部レヴェルでは、別の反応もあった訳で、ガルヴィはこう回想している——我々モスクワのメンシェヴィキはペテルブルク・ソヴェトに不信を抱き、彼らはモスクワを実現不可能な所へつれて行くこうかと思つた。トロツキーら、ペテルブルク・ソヴェト執行委員会逮捕に抗議する、そのゼネスト宣言をモスクワのメンシェヴィキは入交つた感で聞いた。ペテルブルクの執行委員会の政策は我々に動揺をもたらした。トロツキー指導下のペテルブルク・ソヴェトで、彼は思想的にパルヴスの影響下にすでにあり、その「永続革命」の立場からして、ペテルブルク・ソヴェトの政策は現状を考慮せず、世間から離れ出していると我々には見えた(38 || 六〇八—六〇九)。ここには、思想的にペテルブルクに期待しえない立場があった。
- (9) 2 || 四、11 || 二二六
- (10) 34 || 三四〇
- (11) 2 || 四
- (12) 2 || 六一七、4 || 一四六一—一四七、11 || 二二二—二二三、15 || 六七—七二、38 || 六〇七、39 || 六四四—六四七
- (13) 2 || 七一八、46 || 一九二
- (14) 16 || 二六〇。なお、この集会について具体的様子を示す資料にまだ出会わない。

- (15) 34 || 三四〇
- (16) 2 || 九、11 || 四二、18 || 三〇、15 || 七九—八二、46 || 一九〇—一九一
- (17) 18 || 七七
- (18) 17 || 二四〇
- (19) 15 || 八二
- (20) 38 || 六〇九—六一〇
- (21) 15 || 八二—八三、38 || 六一〇—六一一。なお、エンゲルスタインは、武装蜂起は伝統的にエスエルのものであり、エスエルを満足させるために武装蜂起の言葉を本文次にみるゼネスト宣言文に入れた側面があるとす。46 || 一九二を見よ。
- (22) 2 || 一四〇、38 || 六三〇
- (23) 11 || 二二三、15 || 八四—八七、16 || 二六〇
- (24) 本文で述べたように、筆者は自前に蜂起計画案は存在しなかった立場をとるが、若干の論者はそれを肯定している。例えば、最も明確にそれを主張するのはO・チャアダ―エヴァで、彼女は①クレムリに対する一点集中攻撃②周辺部から中心へ徐々に進攻する、の二案があったとする(32 || 四一)。しかし彼女は典拠を示していない。もう一人のセドイはモスクワを環で取り巻き、徐々に中央をめざす案があったとする(11 || 二五)。彼らが言うように事前にそうした案が存在したとしても極めて不十分なものでしかなく、むしろここでの問題は、たとえ十分に練られたものがあつたとしても、本文で示すように事態の進展はおそらくそれを結局は無視したであろうことである。

### 五 蜂起の過程

- (1) 以上は2 || 二〇—二四、16 || 二六四、39 || 七六四
- (2) 46 || 一九四
- (3) 39 || 六五四—六五五。ただし、2 || 一一八はリヤザン || ウラル、キエフ || ヴォロネジ両線は七日夜スト入りしたとし、30 || 一一三はニコライ、リヤザン || ウラル両線を除く全線が七日にスト入りしたとする。
- (4) 18 || 一二六、35 || 一三六

- (5) 35 || 一六八、39 || 七二七
- (6) 2 || 一九五
- (7) 2 || 一九六一一九六、47 || 一二九
- (8) 2 || 一九四
- (9) ヴァシーリエフ || ユージンは七日昼一時からあったという連合委員会の様子をこう回想する——更に何をやるのか、蜂起へどう移行するののか、軍をどう引きつけるののか、それをどう利用するののか、技術的に武装闘争をどうやるののか、我々には分からなかった。我々には軍事専門家は、私はメンシェヴィキに期待出来る者の存在をたずねても、否定的な回答しかなかった(15 || 八九)。
- (10) 15 || 九一、九四、九六
- (11) 15 || 九一、九八、42 || 一五八一—一五九
- (12) 2 || 二四
- (13) 2 || 三三
- (14) 39 || 六三四—六三五
- (15) 「モスクワ労働者代議員ソヴェト・イズヴェスチヤ」〔以下イズヴェスチヤ〕第三号(九日付)(14 || 一二〇)
- (16) 「イズヴェスチヤ」第三号(九日付)(14 || 一一九)、2 || 三〇
- (17) 「イズヴェスチヤ」第四号(一〇日付)(14 || 一二八)
- (18) 2 || 三二
- (19) 2 || 三四—三八
- (20) 「イズヴェスチヤ」第三号(九日付)(14 || 一一七)、2 || 一四一、一四四、16 || 二六五—二六六、39 || 六五五—六五六、47 || 一三〇
- (21) 48 || 二七七
- (22) 2 || 二八一—二九
- (23) 2 || 二六一—二七

- (24) 2 || 二〇三、二〇五
- (25) 2 || 三三—三四、39 || 六六七—六六九
- (26) 30 || 一一四—一一五。なお、トロツキーはこのペテルブルク・ストをこう観察している——このストは八日に始まり、翌日絶頂に達し、一三日には衰えを見せ、一月ストに比し、揺かに結束を欠いた。「その理由として」大衆の意識に一月九日〔血の日曜日事件〕が消えがたく焼きつき、守備隊に直面して、労働者は蜂起の主導権をとれなかったこと、また、ニコライ線が運行を続けたのは当時、首都に蔓延していた全般的な待機主義的雰囲気は鉄道同盟にも反映したためである (9 || 二二二〔49 || 二三〇—二三一〕)。
- (27) 2 || 一六三、42 || 三四、46 || 二〇〇
- (28) 17 || 六七
- (29) 3 || 一〇八—一〇九。一二月一日、同「部隊」アジトが襲撃された時の逮捕者には農民、貴族なども含まれている。
- (30) 2 || 一六四—一六五
- (31) 2 || 二一一
- (32) 2 || 一六六、一六九
- (33) 地区別「部隊」については、例えば、34 || 二九二をみよ。蜂起時の「部隊」員総数は、その性格から特定が困難であるが、例えば、トロツキーは政党系列の数を七、八〇〇人、鉄道関係を五〇〇人、印刷工と店員の志願狙撃兵を四〇〇人としている (9 || 二二二〔49 || 二四二〕)。合計で千六、七百人であるが、ヤコヴレフの場合、武装二〇〇〇人、非武装四〇〇〇人が推定最大値としている (42 || 一一八)。しかし、筆者のまさに印象ではこれらの数値は大きすぎる感がある。なお、34 || 二九六以下にロシア社会民主党「部隊」規約なるものがある (日付なし)。これは、「部隊」を武装蜂起を準備し、その遂行を容易ならしめる目的をもち、「部隊」は工場集会の構成に入り、工場委員会に推薦された自覚的労働者の中から、地区戦闘組織者により直接結成され、その戦闘基本単位は五人とする、等を規定している。
- (34) 2 || 一七一
- (35) 2 || 四三—四五、38 || 六二—六八
- (36) 2 || 四六、二〇七—二〇八

- (37) 2 || 一五〇—一五二、11 || 二二七
- (38) 「イズヴェスチャ」第五号（二一日付）（14 || 一三四—一三五）、2 || 一八二。11 || 二二七—二二八は八日とするが誤り。
- (39) 「イズヴェスチャ」第四号（二〇日付）（14 || 一二七）
- (40) 2 || 一四二
- (41) 3 || 二九
- (42) 2 || 五〇
- (43) 34 || 三五二
- (44) 2 || 四七、16 || 二六七、39 || 六九七—六九九
- (45) 2 || 四三
- (46) 「イズヴェスチャ」第四号（二〇日付）（14 || 二三〇）、2 || 四一、39 || 六六一—六六二
- (47) 2 || 五八—六一、六九—七〇、39 || 六九七—六九九
- (48) 2 || 六三、11 || 二三九—二四〇、39 || 六九七—六九九。ヤコヴレフ（42 || 一七一）は、一月九日は平和的ストから蜂起へ変る日になる。この変換は大衆の自然発生的な圧力の下でおきた、とするが、この表現を借用するとしたら、一月一日
- 日こそがそうであろう。
- (49) 2 || 六四—六五
- (50) 「イズヴェスチャ」第五号（二一日付）（14 || 一三八）
- (51) 2 || 一五五
- (52) 2 || 一七三—一七四、47 || 一三〇
- (53) 2 || 一四二—一四三、一四七、11 || 四二—四三、38 || 六三〇、46 || 二〇〇
- (54) 35 || 一七〇
- (55) 34 || 三五九
- (56) 35 || 一七〇—一七一
- (57) 「イズヴェスチャ」第五号（二一日付）（14 || 一三四—一三六）、2 || 一四五、39 || 六六五—六六六、42 || 一七六以下

- (58) 2 || 七五以下
- (59) 8 || 七
- (60) 2 || 一五六、一五八
- (61) 2 || 一二〇、45 || 二〇四、48 || 二七三
- (62) 3 || 八八―八九、17 || 一一〇、45 || 二〇二、二〇三、48 || 二七三
- (63) 2 || 一二一、24 || 三九八―三九九
- (64) 17 || 一〇―一二
- (65) 3 || 八九―九一、22 || 一八、24 || 三九九、34 || 三五九、39 || 六七九―六八一、45 || 二〇四―二〇五、48 || 二七四
- (66) 2 || 一三〇―一三二、39 || 六九五―六九七
- (67) 2 || 一八
- (68) 11 || 三三、17 || 一一三
- (69) 2 || 一二七―一二八、22 || 二二、27 || 八七、30 || 一一八、39 || 六八二―六八三、45 || 二〇五、48 || 二七四。特に一二日に  
 ついては、39 || 七〇―一七〇三をみよ。
- (70) 39 || 六七六―六七七
- (71) 39 || 六七八―六七九
- (72) 3 || 三五―三六
- (73) 35 || 一七一
- (74) 2 || 二〇六
- (75) 2 || 九八―九九
- (76) 2 || 八七―八九、35 || 一七二
- (77) 2 || 九〇
- (78) 2 || 九七、11 || 二五〇―二五一
- (79) 3 || 三六、34 || 三六五、35 || 一七二、39 || 六八四、七〇五―七〇六

- (80) 2 || 一六〇
- (81) 2 || 一四三、一四七、38 || 六五四
- (82) 2 || 二二二—二二三
- (83) 2 || 九七—九八
- (84) 2 || 一六〇—一六一
- (85) 2 || 九九、11 || 二五一
- (86) 2 || 一四七—一四八、11 || 二三四—二三五、15 || 一一〇—一一一、16 || 二八七。ガルヴィ(38 || 六五七)は地区ソヴェトの検討を待って、執行委員会が最終決定をすることになったとする。
- (87) 34 || 三七五
- (88) 39 || 七〇—七〇七。同七〇八—七一では、一七日になっている。
- (89) 39 || 六八五以下
- (90) 35 || 一七三
- (91) 35 || 一七三、39 || 七〇七以下
- (92) 2 || 一四八、15 || 一一二、16 || 二八七
- (93) 2 || 一四八
- (94) 17 || 五八
- 六 プレスニャにおける闘争
- (1) 32
- (2) 工場史叢書については、52をとりあえず参照されたい。
- (3) ロシコーヴァについては、53をとりあえず参照されたい。
- (4) 32 || 一四
- (5) 32 || 三五

- (6) 11 || 二五(セドイ || ボリシエヴィキ)、32 || 一一四(Π・E・エファイーモフ || マモントフ工場労働者、メンシエヴィキ)、  
32 || 一八三(C・Γ・マズール || プロホロフ工場労働者、メンシエヴィキ)、38 || 五二四(ガルヴィ)
- (7) 32 || 一三七
- (8) 32 || 一一三
- (9) 11 || 二六
- (10) 38 || 五二三、五二四、五九四―五九五
- (11) 32 || 五六
- (12) 32 || 七一―七二
- (13) 32 || 一四五、一五一
- (14) 32 || 一九五
- (15) 32 || 二〇三
- (16) モロゾフ綿工場ストライキをさす。これについてはとりあえず54をみてほしい。
- (17) 32 || 一五七―一六〇
- (18) 32 || 八九
- (19) 32 || 一七三―一七四
- (20) 32 || 一八二―一八三
- (21) 32 || 一三八
- (22) 32 || 七七
- (23) 3 || 五二、六五
- (24) 38 || 五九七以下
- (25) 3 || 六五
- (26) 38 || 五九七―五九九
- (27) 34 || 一一八、46 || 二一八

- (28) 38 || 六一―六一二
- (29) 18 || 一〇三―一〇四
- (30) 例え、 3 || 五四、 32 || 五八
- (31) 35 || 八〇
- (32) セドイは蜂起時、ポリシエヴィキ・モスクワ委員会戦闘組織との結合を図ったが、失敗したという。 35 || 八一
- (33) 32 || 九四
- (34) 32 || 九五
- (35) 32 || 一二一、 35 || 一二四
- (36) 3 || 六六、 16 || 二六九―二七〇
- (37) 18 || 一〇四、 32 || 七八
- (38) 32 || 一二二
- (39) 32 || 七八、 一二二
- (40) 2 || 一〇二
- (41) 11 || 二七
- (42) 38 || 六一三
- (43) 2 || 一〇二
- (44) 32 || 一四八
- (45) 18 || 一〇四
- (46) ガルヴィ(38 || 六三九)は蜂起時、プレスニャの「部隊」は三党派あわせて二〇〇―三〇〇人、おくれ、他地区から一〇〇人程が合流したとする。
- (47) 18 || 一一三、 32 || 一一六、 一二三
- (48) 11 || 二七
- (49) サツヴァ・モロゾフについては、とりあえず、 56 || 九二註22をみよ。

- (50) 18 || 二七、八一、一二三、35 || 一〇一—一〇二、一〇八以下
- (51) 35 || 一〇三
- (52) 18 || 七〇—七五
- (53) 32 || 七五、七八、一七五—一七六
- (54) 32 || 一六四
- (55) 2 || 一〇三
- (56) 3 || 五四、32 || 一〇四、39 || 七二—
- (57) 35 || 一一五
- (58) 2 || 一〇三
- (59) 32 || 五九、七八
- (60) 18 || 一四八—一四九
- (61) 18 || 七八
- (62) 35 || 一〇六
- (63) 35 || 八一
- (64) 35 || 八四—八五
- (65) 「イズヴェスチヤ」第四号(二〇日付)(14 || 一三〇)、39 || 六六一—六六二
- (66) 32 || 七九、38 || 六四七
- (67) 本文中の「自治共和国」云々はB・C・モロゾフの言であるが、蜂起時には市周縁部の **Дорожско-Симоновская Слобода** には **Симоновская республика** なる用語が使用された。42 || 一八九をみよ。
- (68) 2 || 一〇一—一〇三、3 || 五四、32 || 九四、一四八、一六五
- (69) 3 || 五五
- (70) 3 || 五五、五九
- (71) 35 || 八五

1905年12月モスクワ武装蜂起（高田）

- (72) 35 || 八六
- (73) 32 || 一四一
- (74) 35 || 八四
- (75) 35 || 八六
- (76) 3 || 五六―五八
- (77) 35 || 八三
- (78) 2 || 一〇四、一〇九
- (79) 2 || 一〇四
- (80) 3 || 六〇―六一
- (81) 2 || 一〇四
- (82) 32 || 一二四―一二五
- (83) 2 || 一〇六、32 || 九六
- (84) 2 || 一〇九
- (85) 32 || 九六
- (86) 32 || 一二六―一二七
- (87) 35 || 八七。2 || 一一一も一六日中止説
- (88) 38 || 六六〇
- (89) 2 || 一一一
- (90) 32 || 九八
- (91) 2 || 一一〇
- (92) 35 || 八七―八八、39 || 六八八―六八九

七 蜂起の帰結

- (1) カザン線の懲罰隊についてはまず6をみよ。さらに、24 || 三九九、39 || 七二九—七三五、45 || 二〇六—二〇七（これは死傷者一五〇人としている）。
- (2) 35 || 一七五
- (3) 39 || 六八七—六八八、六九〇—六九二
- (4) 11 || 二五四
- (5) 以上、一七日については10の他に、2 || 一二二以下、7 || 二五三—二五四、34 || 三七八、三八二、35 || 一七四—一七五
- (6) 2 || 一一四—一一五
- (7) 39 || 七一三—七一五
- (8) 24 || 一七六、34 || 三八二、39 || 七二一—七二二
- (9) 11 || 二五六、34 || 三八三
- (10) 2 || 一八九—一九一
- (11) 34 || 三九〇
- (12) 9 || 二二三(49 || 二四三)
- (13) 41 || 二八
- (14) 2 || 一九九
- (15) とりあえず、55 || 八六以下をみてほしい。
- (16) 11 || 三〇

参 考 文 献 一 覧

- 1 И. Книжник-Ветров. Библиография по истории московского вооруженного восстания в декабре 1905 г., «Проблемы марксизма», 1931, No. 1.
- 2 Москва в декабре, М., 1906.

- 3 Московское вооруженное восстание (по данным обвинительных актов и судебных протоколов), вып. 1, М., 1906.
- 4 Москва на баррикадах (Впечатления очевидца), М., 1906.
- 5 М. Б-в. Очерки по истории железнодорожных забастовок в России, М., 1906.
- 6 В. Владимир. Карательная экспедиция отряда лейбгвардии Семеновского полка в декабрьские дни Московско-казанской железной дороге, М., 1906.
- 7 В. Романов. Движение среди служащих и рабочих русских железных дорог в 1905 г., «Образование», 1907, No. 6, 7.
- 8 И. Ржанов. Декабрьское московское вооруженное восстание в 1905 г. (7-31 дек. 1905 г., Из записных листов очевидца и наблюдателя), 2-е изд., М., 1909.
- 9 Л. Троцкий. 1905, 4-е изд., М., 1924.
- 10 В. Сторожев. Ф. В. Дубасов и Г. А. Мин на Пресне в 1905 году, «Голос минувшего», 1918, No. 4/6.
- 11 Декабрьское восстание в Москве 1905 г., М., 1920 [1919].
- 12 [В.] Сторожев. Декабрьское вооруженное восстание (по архивным материалам), [б. м.], [1922].
- 13 Путь к Октябрю, вып. 1, М., 1923.
- 14 В. И. Невский (сост.). 1905, Советская печать и лигерагура о советах, М.-Л., 1925.
- 15 М. И. Васильев-Южин. Московский совет рабочих депутатов в 1905 году и подготовка им вооруженного восстания, по личным воспоминаниям и документам. М., 1925.
- 16 П. Горин. Очерки по истории советов рабочих депутатов в 1905 г., М., 1925.
- 17 Пятый год, сборник первый, М., 1925.
- 18 Декабрь 1905 года на Красной Пресне, 3-е изд., М.-Л., 1925.
- 19 Замоскворечье в 1905 г., М., 1925.
- 20 Ив. Марута. Очерки по истории революционного и профессионального движения на Московско-Киево-

- Воронежской железной дороге, вып. 1, Курск, 1925.
- 21 С. Антоневич. Очерки истории Союза 1905 года—в кн.: Сборник No. 3, М.—Л., 1925.
- 22 Железнодорожники в 1905. (Очерки из истории Союза), М., [б. г.].
- 23 В. Ульяновский. Восстание Ростовского полка в декабре 1905 года, «Каторга и Ссылка», 1925, No. 6.
- 24 С. Иванов. Карательная экспедиция полка Римана, «Красный Архив», 1925, No. 4/5.
- 25 А. Паулиш. Забастовочное движение на Риго-Орловской железной дороги (1905 г.), «Пролетарская Революция», 1925, No. 11.
- 26 В. Н. Переверзев. Первый всероссийский железнодорожный союз 1905 года, «Вылое», 1925, No. 4.
- 27 Б. Кругляков. Правительство и железнодорожные забастовки в Петербурге в 1905 году, «Каторга и Ссылка», 1925, No. 2.
- 28 Его же. Революционное движение среди железнодорожников в 1905 году, «Пролетарская Революция», 1925, No. 11.
- 29 Его же. Профессиональное движение железнодорожников в 1905–1907 гг., «Красная Летопись», 1926, No. 3.
- 30 Н. Ростов. Железнодорожники в революционном движении 1905 года, краткий исторический очерк, М.—Л., 1926.
- 31 И. Я. Шабров. О восстании Ростовского полка в декабре 1905 года, «Каторга и Ссылка», 1926, No. 6.
- 32 Рабочие Трехгорной мануфактуры в 1905 году, М., 1930.
- 33— Из истории революции 1905 года в Москве и московской губернии, М., 1931.
- 33 1905, Армия в первой революции, М.—Л., 1927.
- 34 В. И. Невский. Советы и вооруженные восстания в 1905 году, М., 1932 [1931].
- 35 Московское декабрьское вооруженное восстание 1905 г., М., 1940.
- 36 С. Черномордик. Декабрьское вооруженное восстание 1905 г., М., 1940.
- 37 Его же. Декабрьское вооруженное восстание 1905 года, «Исторические записки», т. 18, 1946.

- 38 П. А. Гарви. Воспоминания социал-демократа, Нью-Йорк, 1946.
- 39 Высший подъем революции 1905-1907 гг., Вооруженные восстания ноябрь-декабрь 1905 года, часть 1, М., 1955.
- 40 А. М. Панкратова, С. И. Черномордик. Декабрьское вооруженное восстание—в кн.: История Москвы, т. 5, М., 1955.
- 41 Революционное движение в армии в годы первой русской революции, М., 1955.
- 42 Н. Н. Яковлев. Вооруженные восстания в декабре 1905 года, М., 1957.
- 43 А. Б. Мельников. Революционное движение в московском гарнизоне в период декабрьского вооруженного восстания, «Исторические записки», т. 49, 1954.
- 44 В. А. Петров. Очерки по истории революционного движения в русской армии в 1905 г., М.-Л., 1964.
- 45 И. М. Пушкарева. Железнодорожники России в буржуазно-демократических революциях. М., 1975.
- 46 L. Engelstein, Moscow, 1905. Working-Class Organization and Political Conflict, Stanford U. P., 1982.
- 47 J. Bushnell, Mutiny amid Repression, Russian Soldiers in the Revolution of 1905-1906, Indiana U. P., 1985.
- 48 H. Reichman, Railwaymen and Revolution, Russia, 1905, University of California Press, 1987.
- 49 Троцкий〔原暉之訳〕『一九〇五年』現代思想社、一九六九年。
- 50 渡辺正幸「一九〇五年十二月のモスクワにおける武装蜂起の失敗とレーニン」『歴史評論』二二一号、一九六八年三月。
- 51 高田和夫「近代ロシアの労働者教育」〔九大〕『社会科学論集』二八集、一九八八年二月。
- 52 高田和夫「工場史」叢書発刊とゴリーキー」和田春樹編『ロシア史の新しい世界』山川出版社、一九八六年。
- 53 高田和夫「近代ロシア労働者論覚え書」『ロシア史研究』二五号、一九七六年。
- 54 高田和夫「ロシア資本主義成立期の労働運動」『土地制度史学』七四号、一九七七年。
- 55 高田和夫「チャイコフスキー・サークルと労働者」〔九大〕『社会科学論集』二二集、一九八一年。
- 56 和田春樹「ロシア第一次革命における労働問題」〔東大〕『社会科学研究』二三卷四号、一九七二年。